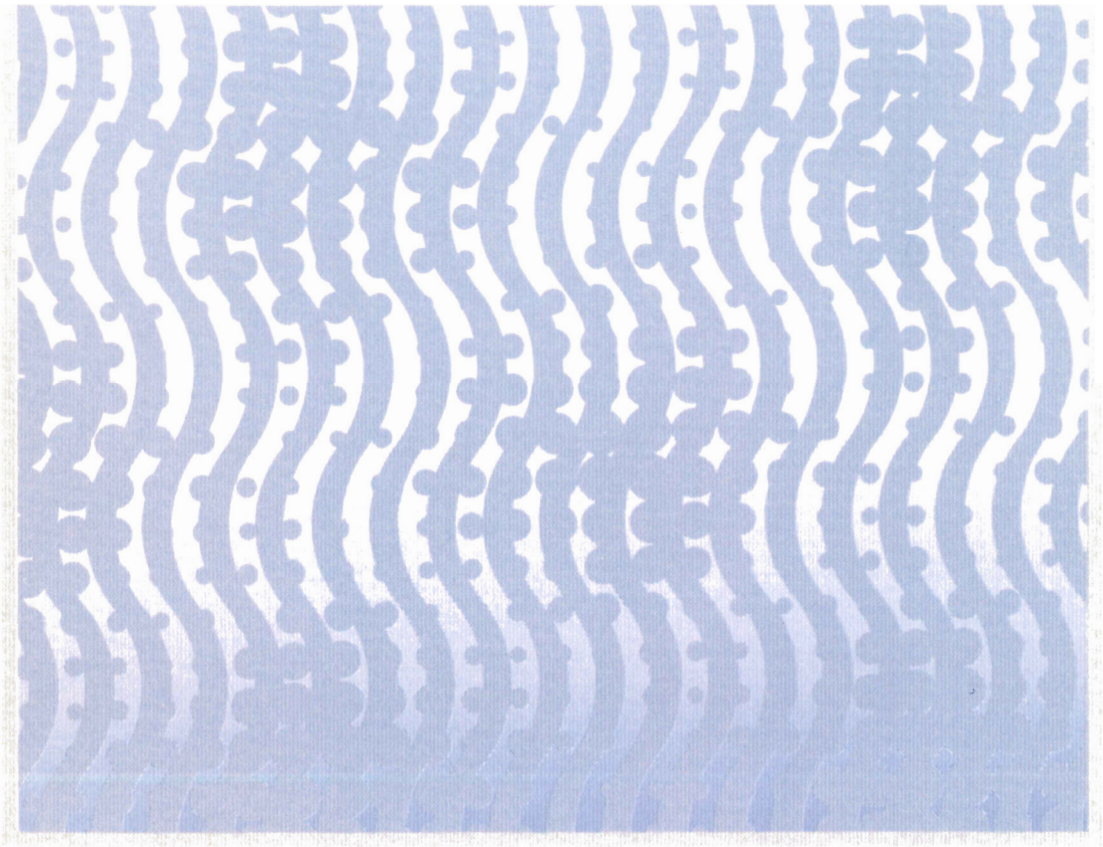
そるえんす



No.19

――目次

巻頭言……1

誌上座談会　国際塩シンポジウムを語る　……2

富士登山を案内して……31

越後新発田藩塩留事件顛末記……35

塩漫筆　塩は肥料か？　……43

財団だより……45

平成6年度助成研究を募集……46

編集後記

考える葦

藤巻正生
東京大学名誉教授

世界保健機構（WHO）のデーターによると、冠動脈症の死亡率は世界各国で異なるが、とくにフランスとアメリカを比べると著しく違うようである。冠動脈症の死亡率や罹患率は脂肪、とくに飽和脂肪酸との相関が一般に高いといわれるが、このことはフランス人にあてはまらない。同じ摂取量の飽和脂肪酸や同じレベルの血清コレステロールで比べても、冠動脈症による１万人当たりの死亡数は、アメリカの182人に対してフランスでは78人とはるかに少ない。

この明らかなくい違いは、The French Paradoxと呼ばれている。多変量解析を使って、赤ワインの消費が冠動脈症と負の相関を示すことが実証され、どうやら赤ワインをいつも飲んでいる人たちは心疾患に罹りにくいと考えられている。

この効果のメカニズムとして、適量（１日５～10ｇ）のアルコールを摂取すると、男性でも女性でも老人でも、よい結果があるようで、ＨＤＬの上昇、アテローム性動脈硬化症や血栓症などの減少と関係のあることも示されているが、疫学のデーターによると、赤ワインはビールのような他の飲みものよりはるかに優れており、その利点の一部は、アルコール以外のphytochemicals（植物性化学物質）であるフラボノイド、カテキンなどといった成分が寄与しているという証拠もある。

それにしても、白ワインの量を過ごすと悪酔するが、赤ワインではそうした心配はないとは外国でよく聞いた話である。

赤ワインにとどまらず、食べものが私たちの栄養や健康に寄与していることは、私たちが1984年頃から食べものの機能を栄養（一次機能）、嗜好（二次機能）に加えて生体調節（三次機能）を新しくとり上げ、この三次機能因子が効率よく発現するよう設計され、特定の疾病の発症を防ぐ目的で作製された食品を〝機能性食品〟として提案、以来その研究は今日まで多くの成果をあげてきているが、アメリカでも国立ガン研究所（ＮＣＩ）が1989年に可食性の果実や野菜に見出される成分（phytochemicals）がガン予防に効果がみられたとして、これらの物質を多く含むようデザインされた食品をデザイナー食品と呼んで研究を進めているが、その後、ガン以外の心臓病、骨そしょう症などの予防についても研究されているし、その名称もデザイナー食品以外にfunctional foods、engineered foods、medical foods、nutraceuticolsなどと提案されている。

わが国では、低アレルゲン米など13品目の〝機能性食品〟が厚生省の特定保健用食品として標示許可されているし（1993年10月現在）、なお申請中のものは10品目をこえている。

食べものは満遍なく食べるのが常道であるにせよ、栄養を摂るために食べるのであり、旨いから食べるのである。さらには健康の維持・増進（三次機能）を考えると、〝考える葦〟である人間はいよいよ〝考えて食べる〟時代に入ったとも考えられるのである。

「国際塩シンポジウムを語る」

1992年4月に京都で開催された、第7回国際塩シンポジウムから1年半余りが経過しました。9年ぶりに開催されたこのシンポジウムは、参加者数や講演件数がいずれも過去最高を記録し、好天と満開の桜にも恵まれて成功裡に終了したことは、関係者の記憶にはなお新しいところです。このシンポジウムの成功をもたらしたものは、関係機関の深いご理解とご支援でありますが、なんといってもその中核はＪＴ（日本たばこ産業株式会社）の全面的なご支援であり、その中でもシンポジウムの準備や運営に尽力された皆さんのご苦労とご活躍を抜きにしては語れません。

そこで本誌では、シンポジウムを支えられた方々にお願いして、思い出や感想などをご投稿願い、座談会の形にまとめました。ご多忙な中をご協力いただいた皆さんに感謝申し上げますと共に、財団でのまとめ方について不備のある点は、お許しをいただきたいと思います。

参加者

（50音順　敬称略　所属はシンポジウム当時）

宇野　守	ＪＴ中四国塩業センター	角　嘉啓	ＪＴ関西塩業センター
大久保和也	ＪＴ海水総合研究所	田口　裕章	ＪＴ関東塩業センター
岡部　誠	ソルト・サイエンス研究財団	中村　正志	ＪＴ本社塩業企画課
加藤ゆき江	ソルト・サイエンス研究財団	中矢　誠二	ＪＴ本社塩技術調査室
後藤富士雄	シンポジウム事務局	成田　俊彦	ＪＴ海水総合研究所
小橋　憲輔	ＪＴ高松塩業センター	長谷川允紀	シンポジウム事務局
小林　研司	ソルト・サイエンス研究財団	林　次郎	シンポジウム事務局
古俣　吉博	ＪＴ本社企画部国際企画室	別所　茂	ＪＴ九州塩業センター
坂本　忠雄	ソルト・サイエンス研究財団	村田　章	ＪＴ本社塩技術調査室
貞永　憲作	ＪＴ本社塩技術調査室	吉岡　利輔	シンポジウム事務局
杉本　浩祐	シンポジウム事務局	若尾　淑栄	ＪＴ関東塩業センター

期　　日　：　1992年４月６～９日
会　　場　：　国立京都国際会館
会期後見学会　：　４月10日　ナイカイ塩業(株)
　　４月10日～12日　トヨタ自動車(株)・箱根観光

大会日程

月　日	昼	夜
1992年 ４月６日（月）	登　録・開会式	歓迎レセプション
４月７日（火）	特別講演 招待講演 分科会（５会場） 見学会：ＪＴ関西工場 同伴者プログラム：京都市内	バンケット （都ホテル）
４月８日（水）	分科会（５会場） 見学会：ナイカイ塩業(株) 同伴者プログラム：奈良市内	ＪＴ・ガラパーティー
４月９日（木）	分科会（５会場） 閉会式 見学会：三洋電気(株) 同伴者プログラム：京都市内	送別パーティー

桜満開の
国立京都国際会館

準備・受付・開会式

戸惑い・手探りの準備段階

――一生懸命だった合唱団

司会　皆さんご多忙な中をご協力いただき、有難うございます。早いものでシンポジウムから間もなく2年になりますが、あのシンポジウムが成功だったと多くの参加者から評価されたのは、いわば裏方として現場でご苦労をされた皆さんの力があったからだと思います。今回はそういったご苦労話を中心に、お話を伺いたいと思います。

それでは話の順序として、準備段階から開会式までのあたりから始めたいと思いますが……。長谷川さんが、この仕事のためにシンポジウム事務局に転入された方としては、一番早かったんですね。

長谷川　私は1989年10月ですから、シンポジウムの2年半前に事務局へまいりました。事務局に来てからの半年は、基本計画を作ったり、ＪＴの意思決定や概算予算の積算などで、アッという間に過ぎてしまいました。

最初に、この大会のキャッチ・フレーズが必要だというので、いくつかの案を出しました。中には「塩、海からの贈り物」という案もありましたが、塩には岩塩もあるので、この案は日本的な発想という異論が出て、結局 “Salt '92, Meeting the Challenges of the 1990's and Beyond” としました。欧米ではこのchallengeという言葉が好まれるようです。初めから国際感覚の難しさを感じさせられました。

私が事務局にきた時には、橋本さんが準備に当たっておられました。翌1990年の4月には吉岡さんと林さんが、その翌年の1991年2月には杉本さんが加わってきて、ＪＴの社員としてはこの5人で最後まで事務局を担当したわけです。また事務局では、先輩の後藤さんが論文審査の関係で1年余りお手伝い下さいましたし、地質学関係の論文の審査などをお願いした、オランダ・ユトレヒト大学のＳ博士の奥様Ｋ夫人――日本の方ですが――も、開会直前の一時期、通訳としてお手伝いいただきました。

司会　吉岡さんが事務局に入られたのは、開催のちょうど2年前だったんですか。

吉岡　そうです。塩技術調査室勤務の内示があった時は、本当にビックリしました。塩の勤務経験はないし、まして塩の技術員でもありませんしね。

どんな仕事を担当するのか、前勤務地の上司に尋ねても「知らない」と言われまして……。しかたなく、大野塩技術調査室長に直接電話をして尋ねたところ、「国際塩シンポジウムをやるので、その事務局に入ってもらいます」と言われ、2度ビックリでした。

何しろ英会話は苦手で、事務局に入ってから半年間英会話学校に通わせていただきましたが、にわか勉強でしたので、日常の会話ですら満足に話せるようにはなりませんでした。1年位は通っておけば良かったと思いましたね。

司会　英会話は、応援の皆さんも勉強されたようですね。

小橋　シンポジウムへの応援ということで、前年の5月から英会話学校に通うことになりました。週2回、小グループでのレッスンでしたが、都合9カ月間、多少落ちこぼれ生徒だったとは思いますが、楽しく授業を受けることができました。

司会　後藤さんは骨の折れる発表論文関係のお手伝いをいただき、ご苦労様でした。審査や修正の折衝などもあって、大変だったと思いますが……。

後藤　私は1991年2月からお手伝いをしました。ちょうどその2月末が講演申込の締切りで、6月までには審査を終わって、ここでプログラムの内

容が固まり、12月には論文の原稿を出していただいて、そのあと審査と修正といったスケジュールでしたが、実際には予定より遅れ勝ちでした。中にはその年の終わり頃になって申し込みが舞い込んで、急遽審査をして採択したものも何件かありました。事務局としてはできるだけ多くの方に参加していただこうという方針で、申し込みの遅れについてもできるだけ対応したわけです。

講演申込者の中には英文の不得手な人も相当多勢いましたが、審査の先生の中には、先ほど話の出たS博士のように、講演要旨のいくつかを全文書き直してくれるような親切な方もいました。シンポジウムの直前になると、論文の提出→修正→再提出など、事務局と著者や審査者の間のやりとりで、海外とのファックスが錯綜するといった状況でした。

司会　開催の案内をするのにも、ご苦労があったようですね。

長谷川　案内は全部で3回出したのですが、そのほかに海外の方の参加の意向を調べようということで、1990年の6月に予備の案内に当たるプリ・アナウンスメントのサーキュラーを出しました。この発送には意外に手間取りまして、夜中までかかってしまったり、航空郵便代が嵩んだり、計画通りにはなかなか進みませんでした。もっとも次のサーキュラーからは、航空郵便代を節約する巧い方法を見つけだしたり、だいぶ手際が良くなりましたが……。

このプリ・アナウンスメントは2,600通ほど出しましたが、返信カードが僅か260通しか返って来なくて、果たして参加者が予定通り集まるかどうかと随分心配しました。結果的にはご存知の通りの盛会になったわけですが、参加者の数には最後までハラハラさせられました。

司会　小橋さんには展示物でもお世話になったようですが……。

小橋　高松塩業センターでは、毎年各センターがデパートなどで開催するイベントに、採かんやせんごうの作業がひと目で分かる「製塩模型」をいろいろと貸し出しています。シンポジウムにこの「製塩模型」を展示したいということで、前の年の9月ごろにご相談がありました。揚浜式塩田、入浜式塩田、流下式塩田、平釜式製塩装置の4点を貸出すことが決まったのは1月頃だったと思います。

世界中から来る方々に見てもらうということで、汚れているところの掃除などの化粧直しをしました。シンポジウムの期間中には大勢の外国の方に見ていただき、日本の製塩の歴史を理解されたことと思います。その時の英語の説明パネルは、今でも資料館に展示して、大切に保管しています。

司会　さて話は会場へということになる訳ですが、中村さんは英会話が達者ということで、送迎や見学のお世話までいろいろご苦労様でした。

中村　あいつがいちばん暇そうだからという訳でもないでしょうが、シンポジウム会期中京都にお邪魔しました。お陰さまで財団や事務局の方々の皆さんや、全国から応援に駆けつけられた塩業部門の方々とお知り合いになり、親しくさせていただくこともできました。また国際的な会議への参加という貴重な経験もさせていただき、本当に有難うございました。

なおこの間職場を空けることになって、職場の上司や同僚の皆さんにご迷惑をお掛けしました。快く送り出していただきましたことに、感謝しています。

司会　現地での段取りなども大変だったと思いますが……。

小橋　シンポジウムの3カ月前の1月に、一緒に仕事をするメンバーが京都に集まりました。ここで仕事の説明と現地見学があって、漸く自分が担当する仕事がおぼろげながら理解できました。

シンポジウムの準備作業には、開会2日前の4月4日から入りました。その最初の作業は、コングレスキット詰めで、参加者に配る書類や筆記具などを鞄に詰める作業でした。20人ぐらいで700セットぐらい詰めましたが大変でした。

この作業では、やり方にもう少し工夫ができたらと思いました。例えば事前に日本人と外国人向けの完成した実物見本を作っておくとか、品物が

入ったダンボール箱には、せめて品物の名前ぐらいは表示して欲しかったと思いました。

加藤　私も４日から準備に加わりました。11時に会議場に着くと、前の日から泊りこんでいる方達だけで、事務局の部屋はまだガランとしていました。早速大会の資料のコピーを頼まれました。

現地で借りたというコピー機が２台あって、これなら早く終わると思ったんですが、このコピー機がなかなかの代物で、紙詰りはするし、熱をもってくるととたんに調子が悪くなって、扉を開けて冷ましたり、一時休止をしたりで、どうにか６時頃までに終わりました。

これを揃えて綴じる作業も大変だと思っていましたが、午後から着かれたスタッフの方達の人海作戦で、その日の内にほぼ終わったようでした。

立ち通しだったせいか足がジンジンして、その晩はおかげで熟睡できました。

司会　受付窓口が、参加者の方々との最初の出会いになるわけですが、どんな様子だったんでしょうか。

成田　２日目の午前中に、海外の予約者受付のカウンターで手伝いをしたんですが、前日にここを手伝った社内の人から、「わりとヒマ！　喋ることもないし、交通公社さんがすべてやってくれるから、にこやかにコングレスキットを渡せばいい」と言われて、気楽に構えていたんです。

ところが実際にやってみると、シャトルバスが着くたびにまとまって来るものですから、その間はパニックになってしまうんです。もちろん他の２人がバタバタしている横でボーッと突っ立っているわけにもいきませんから、私も一緒になって対応したんですけど、手元のリストに載っていない人が結構いまして、そのたびに「ジャスト・モーメント！」と叫んで、ＶＩＰの受付カウンターに飛んで行ったりしました。

後で見た「そるえんす」の特集号に、ちょうどその奮闘している様子が写真で出ていましてね。後ろ姿なので言わなければ誰にも分かりませんが、「秘かな……」いい思い出になりました。

後藤　私は論文受付デスクにいたんですが、中国の方が来て、英文のパンフレットを差し出してしきりに何かを訴えるんです。しかし英語がよく通じなくて要領を得ません。言っていることは「講演発表の申し込みをしたが、審査の結果不採択になった。しかし中国内でこの研究は高い評価を得ているので、再考して欲しい」ということのようでした。この受付ではどうすることもできないことをよく説明をして帰ってもらいました。その後、本人の先輩か上司の人がきて同じ主張を繰り返すので、こちらも再度説明をして引きとってもらいましたが、ずいぶん長い時間、デスクの前を占領されてしまいました。

シャトルバス　会場に到着

司会　開会式ではＶＩＰへの対応とか、合唱団の子供達の世話なども大変だったんではないですか。

若尾　開会式で京都市長をお迎えして、壇のところまでご案内した時には、ＶＩＰの前で足を滑べらせて転んだりしないようにと緊張しました。

３日目の夜のガラパーティーで、ＪＴの水野社長を会場までご案内した時もそうでした。

小橋　開会式では、合唱団の皆さんへのおみやげを用意するのが私の役目でしたが、５階の広間で長い時間待たされたためか、団員の１人が具合が悪くなるというトラブルが起きました。事前に飲み物と簡単なオヤツを、子供たちのために用意しておくべきであったと思いました。

宇野　私は仕事が毎日変わって、何をしたのか

あらかた忘れてしまいましたが、初日のことでは開会式のセレモニーで、5階の合唱団の控室とステージの間を、階段を使って往復したことを覚えています。リハーサルの時に、緊張のあまり女の子が貧血で倒れて、京都病院の副看護部長さんにお世話になりました。

控室との間が、階段での昇り降りだったせいもあって、会館側が用意していた水――お茶の方が……、と思ったんですが――も、あっという間になくなりました。会館側に補充するように要求はしましたが、非常に長く待たされて、子供たちが可愛そうでした。また控室といっても椅子ひとつなくて、もう少し気配りがあってもよかったのではないでしょうか。

けなげだったのは貧血で倒れた女の子で、本番の時には一生懸命に歌っていました。

司会　合唱はとても好感を持たれたようですが……。

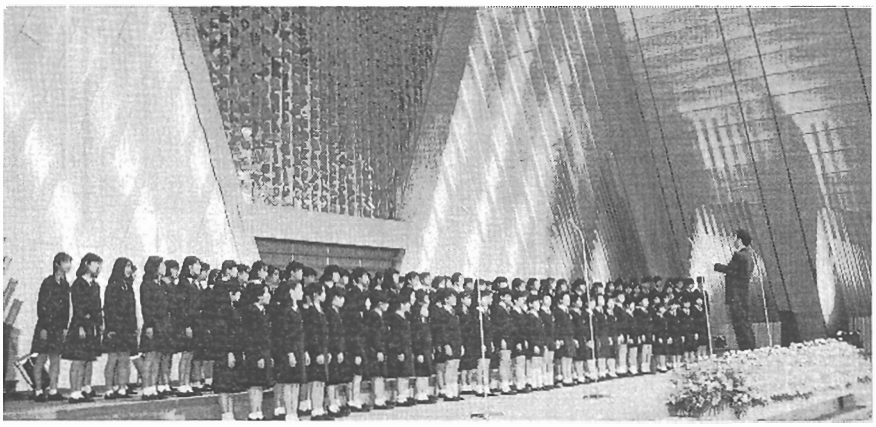
吉岡　開会式の出し物はとくに苦心しました。国際シンポジウムでは、「能楽」とか「獅子舞」のような、日本古来の文化を代表するような出し物が多いようでした。とくに「能楽」の場合は、優雅で日本古来の文化を紹介するには、最も相応しいと思うのですが、静かすぎて外国人には若干物足りなさがあると聞きましたので、まず他の出し物から選択しようと思いました。

そんな時に、以前にこの国際会館で、名前は忘れてしまったんですが、40人編成のプロの少年少女合唱団が出演して、とても好評だったという話を耳にしましたので、総務委員会の承認も受けて、会館のU氏を通じ頼んでもらって〝OK〟の返事をいただきました。ところがその後になって、シンポジウムの開催日頃に、その合唱団の10周年記念コンサートを開くことになったので出演できませんと断ってきたので、困ってしまいました。

代りを探したのですがなかなか見つからなくて、たまたまやはり会館のU氏から、京都市の教育委員会で少年少女合唱団を指導育成しているということを聞きましたので、早速当たってみました。最初は、外国人の前では歌ったことがないとの理由で躊躇していたのですが、「是非に」ということで、出演していただいたわけです。

当初は、舞台の関係で50人位の編成でお願いするつもりでしたが、実行委員長の方から、人数が多い方が迫力があって良いのでは、という意見もありましたので、200人の団員全員に出演してもらうことにしました。結果として、200名編成にしたことと、素人の少年少女合唱団でとても清純な印象だったことが、良かったのではないかと思っています。

若尾　シンポジウム期間中は、ほんとうに春爛漫で……。国際会議場にふさわしい日本庭園に咲き乱れていた桜の花が印象的でした。とくに開会式の後の歓迎パーティーでの夜桜は、とても素晴らしくて……、10年分ぐらいの桜をまとめて味わったような感じでした。



京都市少年少女合唱団

特別講演・一般講演

思い出多いスライドがらみの「事件」

―― 知恵と決断で必死の対応

司会　それでは話を講演会の方に進めさせていただきます。今回は分科会に分かれての研究発表の前に、全員が一堂で聴く特別講演と招待講演を行いましたが、そのあたりからお願いします。

杉本　特別講演の始まる前に会場を見ておこうと思って、15分ぐらい前に会場のメインホールに行きました。人数は思ったより多いように感じましたが、何か変だ。前から５列ぐらい、人が誰も座っていないんです。行ってみると、前日の開会式で使ったＶＩＰの指定席の名札が、まだ入れたままになっていました。これでは誰も座らないわけだと思って、名札を外していったんですが、この数が意外に多い。これでは時間が足りないと思っているところに、ＪＴのWさんが手伝いに来てくれました。この人の仕事の速いこと、あっという間に名札を取り外してくれました。もちろん時間内に……。Wさん本当に助かりました。名札がなくなったら、やはり前席も埋まって来ました。

ところが当然定刻通りに始まるものと思っていた特別講演が、どうしたことか10分ぐらい遅れて始まったのには拍子抜けしました。

村田　私は特別講演でのスライドを担当しました。そこでのハプニングがなんと言っても一番思い出に残っています。

スライド係を経験された人なら、誰しも「何のクレームもなく、何のトラブルもなく、ただ無事に終わりたい」と思うのではないでしょうか。そんな願いも空しく起きたんです。ハプニングが……。

確かイギリスの、レスター大学医学部長のＳ博士の講演の時でした。午前中最後の講演で、皆が関心を持っている塩と健康について講演を進めていました。恐らく話も佳境に差しかかった頃と思います。

彼から「次のスライド」と指示されたのですが、スライドが中途半端な状態になって前に進まないのです。その時スライド係は３人で分担していました。２人はＳ博士の原稿をダブルチェックして進行を確認する係。１人はスライドを操作する係でした。この突然のハプニングに、３人とも暗闇の中で顔を見合わせ茫然としていました。「何とかしなければ……。」

その時、Ｕさんが何かシール状のものがはさまっていることに気付きました。Ｓさんが「シャープペンシルで取れないか」と言いました。私は手持ちのシャープペンシルで取ろうとしましたが、所詮シャープペンシルの太さでは、スライドの溝まで入る訳がありません。「溺れる者は藁をも摑む」とはまさにこのことです。

次に、国際会議場の係の人を呼ぼうかとも考えました。しかし連絡をとっている間に講演はシラケてしまうかも知れません。

ついに３人は決断しました。「とにかく一度ホルダーをはずして取れるかどうかやって見よう」。ピンセットなどの何の道具も持たずに、しかも明かりもつけてもらえない状況で、この作業に挑むのは勇気のいるものです。心の中では「スライド係が気にするほど、周りは気にしてないよ」、「直らなかったらしょうがないじゃないか！」と、半ば居直りの気持ちでつぶやいていました。

そう心を決めたとき、神は私たち３人を救ってくれました。何と、スライドホルダーを外した拍子に、ファンの風でシール状のものが取れて飛び出したのです。

こうなると、あとはホルダーをセットして彼の講演にまた合わせるだけです。「No.29でトラブったから、No.33ぐらいでセットすればいいだろう」、「仮に違っても、彼が前に戻せとか、先に送れとか言

って来るだろう」。結局ちょうど良かったようでした。その後は順調に進んで彼の講演が終了しました。

私たち３人はスライドを片付けホッとしてメインホールを出て来ました。その時、東京の事務局で通訳の応援をされ、顔なじみになっていたK夫人が私たちを見付け、人なつっこい顔で言ってくれました。「Nice recovery!」。この言葉が何と心地良かたことか。

坂本　その「スライド事件」は、私にとっても忘れられない思い出です。

その時には今お話のあった３氏がスライド係で、ＪＴ海水研のK氏と私が会場係、ＪＴ塩技術調査室のN氏がタイムキーパーといったスタッフで、メインホールを担当していました。

講演の前に別の部屋で、講演者のＳ博士と座長のH先生にも立会っていただいて、スライドの試写をした時には全く気づかなかったのですが、Ｓ博士のスライドマウントのいくつかには、スライド製作会社のロゴが印刷されているらしい小さなシールが貼ってありました。「あれ位の先生になると、スライドは外注で作っているのかなあ」と思った記憶があります。このシールが、本番中にプロジェクターの中で剝がれ落ちて、ひっかかったようです。

そしてとりあえずホルダーを外すことになったんですが、ここで感心させられたのはM氏の冷静さでした。私ならそのまま何も考えずにホルダーを持ち上げるところですが、M氏は取外す前に、何番のスライドがトラブったのか、つまりその時にプロジェクターにスライドが挿入されて空になっているホルダーの場所の№を、ちゃんと記録していました。あのドサクサの中で、よくも冷静さを失わなかったものだと感心しています。

とにかくそうやって紙片を取りはずして、原状に復帰したんですが、その間同時通訳のイヤホンからは、Ｓ博士の「ここは話のヤマです」とか、「このスライドがないと……」などが聞こえて来るし、H先生からは「スライド、次のはまだ入りませんか」と言われて、焦りに焦った数分でした。

貞永　私もその時のスライド係の１人でした。突然スライドが動かなくなって、スライド係の３名、本当に顔面蒼白だったと思います。トラブルが起こった直後は、15秒位も沈黙していたでしょうか……。

それから意を決して、スライドナンバーを確認してからスライドホルダーを取り外して、詰まっていたシールを取り除いて復帰するまで、１分位だったでしょうかね。何とも長い１分間でした。

坂本　そのトラブルのせいではないのですが、メインホールでの午前の講演が、予定よりもだいぶ遅れて終ったために、ランチタイムが短くなりました。

私はＳ博士にスライドを返却する準備をしていたので、午後のスタートまでの時間がなくなり、とうとうこの日の昼食は摂れなかったのも思い出の１つです。

分科会のスライド担当者

司会　一般講演でのスライドでも、いろいろあったようですが……。

坂本　シンポジウムの思い出はスライドからみが多いんです。今度は製塩技術などの第３分科会の会場、つまり私が会場責任者を担当していた会場でした。

初日のそれも第１番目のアメリカのM博士のスライドが、開始10分前になっても、会場前のスライド受付に届いていないんです。

開始７分前頃に座長の早稲田大学のＴ先生が、M博士を伴って会場受付へやって来られました。Ｔ先生とM博士とは、古くからのご友人とのこと

でした。T先生に「M博士のスライドがまだ届いていないのですが……」。するとM博士は「OHPシートを持参したため、事務局を通して会館にスライドの作成を依頼した」とのこと。カウンターにいたスタッフ全員が「エッー!?」でまた顔面蒼白、背中に冷汗が流れました。

私が内線ポケベルで、事務局のS氏を呼び出してそのことを伝え、彼から会館の担当者に内線ポケベル。結局スライドはかなり前にでき上がっていたけれども、担当者にそれが伝わっていなかったようでした。S氏に連絡してから2・3分で、スライドが会場に届きました。

それからスタッフ全員でホルダーへセットして試写、演者のOKをいただいたのが定刻2分前。ギリギリセーフ。本人も慌てたらしくスライド預かり書をカウンターに忘れていったため、私が開始直前に演者に手渡しに行きました。その時、"I'm sorry, there were our mistake..." と何やら訳の分からない英語を連発して、ひたすら謝りました。M博士は "Don't worry..." とか何とか言って慰めてくれていたようですが、全く聞き取れませんでした。

M博士と握手を終わった頃に、座長のT先生が一般講演の開始を告げて、M博士の名を読み上げていました。とにかく間に合って良かった。

杉本　たぶんその話だと思いますが……。とにかくあのポケベルはよく鳴りました。きっと性能が良かったんでしょう。

話を聞くと、どうも会館で作ってもらったスライドがなくなったということらしいんです。あれほど「スライド以外はダメですよ」と案内しておいたのに……と思いながら、まずスライド作りを頼まれた窓口の人を探しました。その人に聞くと「確かにスライドを作るように頼まれたけれども、何で自分が取りにいかなきゃいけないんだ。」というんです。話をするだけ時間の無駄と思って次を当たりました。

結局Mr. Xが、最後にスライドを持って行ったらしいというところまでは分かったのですが、さて「Who is Mr. X?...時間がない」と焦りました。一番Mr. Xに近いと思われる人物に見当をつけて、スライドを持って行かなかったか聞いたところ、「私が保管しています」という答えが返ってきました。

「あんたが保管してどうするんだ」と思いながら、Mr. Xからスライドを受け取って講演会場に走りました。こうして本人にスライドを渡したのが講演開始3分前……。英語で「済みません（これは得意なんです）」を連発して……。相手の外人は、「時間に間にあったんだから気にするな」と気分を害しているようにも見えず、ひと安心しました。

坂本　スライドの話しでもう一つ。ジーンズにポロシャツ、ブレザー姿でカウンターにやってきた中国の男性の発表者で、スライドが確か6枚。何と黒のラシャ紙で、35mmスライドマウントらしきものを作ってあったんです。それも大きさは定型よりもかなり大きくて、さらに不揃い。カウンターのサイマル社の女性通訳を通じて、「このスライドマウントでは、使用できない」と伝えましたが本人はうなずきもせず、反応がありません。体当たりのデタラメ英語で、この6枚のスライドは使えませんと繰り返しましたが、全然ダメ。

何回かこんなことを繰り返しているうちに、この方は英語が全く分からないことが判りました。そこでロビーにいた中国からのグループの所に行きまして、誰彼かまわず "Can you speak English?" とやりました。何人目かでやっとニッコリした男性がいたので、彼の手を掴んでカウンターに戻って、定型のマウントに入れ替えてくれるように発表者に伝えてもらいました。

結局このスライドは、事務局で用意していたマウントを取りに走って取り替えましたが、これを見ていた通訳をした方も、「私も取り替えよう」とばかり、同じようにラシャ紙で作ったスライドをカバンから取り出して、チャッカリと作業を終え、このスライドをその会場のカウンターに預けて、何処かに消えてしまいました。

この話にはまだ続きがありまして、その通訳氏がスライドの預かり書に書いた名前は、その会場

の発表者のリストにはないんです。探して行きますと、その方は医学の第４分科会の会場の、それも代理発表者でした。医学の会場のカウンターに事情を話してスライドを届け、やっと一件落着となりました。

大久保　今の話とも関係があるようですが、私は岩塩採掘などの第１分科会の会場で、スライドの係をやっていました。スライドが厚すぎてスライドホルダーから映写機に入って行かないことがありました。仕方がないので、スライドホルダーを映写機からはずして１枚１枚を手で出し入れしたんですが、スライドを映写機から出す時に、まるでトースターから焼けたパンが出てくるように飛び出してきて、床に落ちたりして差し替えが大変でした。

貞永　私はその会場の責任者でしたが、中国の方の発表の時には気をつけておいた方がよいとの情報もあり、２階のスライド映写場の近くにいました。そして２人がかりで一枚ずつ手動で、スライドを飛ばしながらの対応となったわけです。

発表が終わって討論の時に、「何番目のスライド」と言われた時には冷汗ものでした。

小橋　スライド係は一番神経を使ったところでした。私は分析や食品の第５分科会の会場だったんですが、スライドのピント調節が大変だということを再認識しました。スクリーンが大きくて、プロジェクターからの距離が25m以上もあって、ピントの確認がプロジェクターの位置からでは肉眼では無理で、双眼鏡でも難しく、本番でも進行係や発表者から何度か指摘を受けました。自動焦点タイプの機器でも、スライドを進めるに従って微妙にピントがずれてくるんです。

そんなわけで、“Slide, start.”の声を聞いてから、スライドの送り、戻し、ピントの調節クレームなどを聞き取りながらの作業で、なかなか大変でした。何とか支障なく務めることができたのは、英会話学校での聞き取りの成果だったと思っています。“Slide. thank you.”の声を聞くまでは気が抜けないので、この仕事では時間の過ぎるのがとても早く感じられました。

また交代で進行係も務めました。進行係は座長の側にある机で、タイムキーパーとか、聴講者数の確認や講演番号の表示などをする係で、この仕事では逆に時間の過ぎるのが長く感じられました。発表者に、ワイヤレスマイクとかレーザーポインターの取り扱い方法を、下手な英語で説明するチャンスは、幸いにしてありませんでした。

座長さんは２人１組ですが、その中の１人が日本人だったことは、素人で英語の得意でない私達にとっては、とても心強く感じられました。

角　私も今お話の会場の運営を担当しました。シンポジウムから１年以上過ぎて、大方忘れてしまいましたが、今でも心に残っていることは、ピント合わせに苦労したことです。

オペラグラスでスクリーンを見ながら、進行係との電話でピントを合わせましたが、スクリーンの中央と端とでピントがずれたり、同じ講演者のスライドでもスライドごとにピントがずれたりしました。講演者に「ピントを合わせてください」と言われたときは、焦りました。

またこの会場には同時通訳がありましたが、ヘッドフォンで日本語を聞きながらでは、スライドの差し替えのタイミングがずれたりするので、生の声のスライド差し替えの合図を必死で聞きました。

体当り英語も大車輪

――評価高かった通訳さん

司会　言葉の問題も含めて、会場の運営にはたいへん苦労されたんですね。

中矢　今までの話に出ました分科会の会場運営チームには、主としてＪＴ応援者が当たりました。

私は英会話がままならないのに、ある会場責任者を仰せつかって不安でしたが、分科会の各会場の受付係に、セミプロの通訳が１人ずつ付くという説明だったので、“Don't mind.”と自分に言いきかせてシンポジウムに臨みました。

何日目だったでしょうか、分科会場の入口近く

のソファーで、次の座長の２人（１人は日本人女性もう１人は外国人男性）が打ち合わせをしているのに気付きました。挨拶をしておいたほうが良いだろうと思って、日本人女性の座長さんに――もちろん日本語で――「自分がこの会場の運営責任者です」と自己紹介をしたまでは良かったのですが、外国人男性の座長さんにも握手ぐらいと思い、不用意に “Nice to meet you.” とやってしまったんです。

その座長さんはおそらく「この日本人は何故私に挨拶をしたのだろう」と思ったのでしょう、握手しながら何やら話かけてくるではありませんか。こういう事態を想定していなかった私は、気が動転してしまい、通訳者を同伴しなかったことを悔やみましたが後の祭り。それでも何とかこの場を切り抜けようと、日本人の座長さんにBody Languageで救難信号を送ったんです。しばらく沈黙の時が流れている間に状況を察知した日本人の座長さんの、「英語もろくに喋れない人が、会場責任者だなんて信じられない」といった感じの冷やかな視線が、今でも忘れられません。

別所　私の担当は、会場内の時間係とスライド係でした。スライドの受付では、ほとんどはサイマル社の通訳さんにおまかせでしたが、たまに２人以上が重なりますと、外国人相手に話さねばならないこともありました。

この時話した英語が、“Your name?”、“Your perform number?”、“OK”、“inside out”、“upside down” だけでした。それ以上になると最初は片言、さらに進みますと、「まいった、サイマルさんお願いします」でした。語学力のなさを痛感した次第です。

スライド受付

小橋　私が担当して一番わくわくしたのは、外国の方と言葉を交わす機会の多い会場受付係でした。ハプニングといえば、ドイツの発表者がスライドを引き取りに来た時の、数が足りないというクレームでした。この時は、どんなスライドがなくなっているのか相手の言っていることがよく分からなくて、通訳に対応していただきましたが、結局この男性の勘違いであることが判り、事なきを得ました。

また大会途中の８日に、通訳の方の到着が電車事故で遅れました。受付けに支障が出るのではと心配しましたが、なんとか無事にこなしました。下手でも４人寄れば、なんとかなった訳だと思っています。

成田　私の担当は第１分科会の会場で、鉱山関係や地質学などのセクションでした。その方面の知識はあまりありませんし、同時通訳もなかったので内容的にはよく分りませんでしが、欧米の岩塩鉱のスライドをたくさん見せていただいたので、「いつか本物を見に行きたい……というか、行かせてもらいたい！」と、強く思いました。

発表者はほとんどがヨーロッパの方で、北欧系の彫りが深い、神経質そうな方の受付けをする時などは、こちらも緊張しました。私が緊張するとどうも悲壮な顔になるらしく、「どこか具合いが悪いのか？」と気遣ってくれる人もいました。でも、ほとんどの人はこういう会議には慣れておられるようで、スライドの装填から試写まで「自分でやるからいいよ」と言ってくれるので、助かりました。

それから、中国からの発表も何件かありましたが、その中で初日に発表したある方が、スライドが規格に合わなかったり、レーザーポインターの使い方を覚えてくれなかったり、早口で聞き取りにくかったりで、ずいぶん苦労しました。後で事務局でみんなと話したところ、彼は他の会場でもパフォーマンスをしたようです。ですから、２日

目に再び彼が受付に現れた時には、正直言って「またか……」と、がっくり来ました。

その会場では40件のうち11件もキャンセルがあって、手待ちの時間も結構ありました。そんな時に窓から見た満開の桜の美しさが、今でも印象に残っています。

田口　とかく日本人は時間に正確と言われるけれど、逆に外国人は時間を気にしない人が多いみたいです。発表時間を10分以上延ばしても平気なもので、タイムキーパーなんて要らない感じでした。それでも本国の社会は平気で動いているのでしょうから、心のゆとりという点で見習う必要があるのかも知れませんね。

だいたいの欧米の方はゆっくりした英語で尋ねてくれるので、なんとか答えられたのですが、インドの方に突然訳の分からない言葉で話かけられた時には、ついうろたえてしまいました。後で通訳してもらったら、英語を話していたらしいんです。付焼刃の英語力がすぐに剝がれるどころではなくて、私は外国人恐怖症になってしまいました。

また、同じ東洋人であるせいか、中国の方の話す英語は分かり易いように思いましたが、残念なことに私の話す英語は、相手によく伝わっていないようでした。

司会　発表は英語でと決まっていたんですが、いろいろあったそうですね。

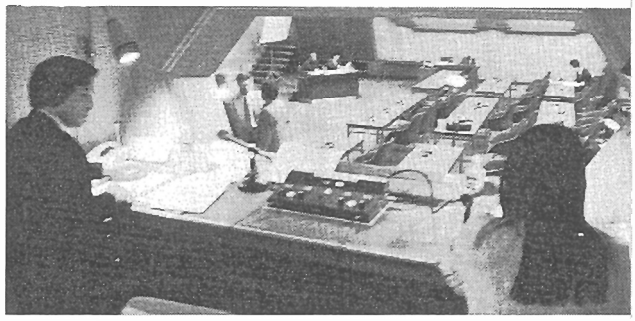
杉本　溶解採塩関係の第２分科会の座長さんから、「中国語と英語の通訳を探して欲しい」という要請がありました。一応探したんですが誰もいなかったので、仕方なく座長さんにそのことを伝えようと思って会場に行きました。

ところが何故か、会場の皆さんが天井を見つめているように見えたんです。気にせず座長さんに「見つかりませんでした」と伝えると、座長さんが「それはもういい、始まったから、中国語で」と言われるので気が付いてみると、なるほど耳慣れない言葉が耳に入ってくるんです。どおりで皆さん天井を見ている訳だと思って納得しました。

坂本　私の担当していた会場でも、こんなことがありました。ある研究発表中に、身体のガッチリしたアジア人男性が私に近づいて、二言三言何か言うんです。発表中だからと、その男性を会場の外へ連れ出して話を聞きますと、「次の発表者は私の友人で、英語が分からない。討論の時には私が英中通訳をするので、今すぐ座長に私を紹介してもらいたい」というわけです。「今は発表中なので……」と渋りますと、「その時になって突然私が紹介もなしに前に出て行けば、皆が不審に思うから、とにかく今すぐ紹介して欲しい」と言われます。

仕方なく、座長さんのところへお伺いに走りました。ラッキーだったのは、その時の座長のお一人が、当時財団の助成研究者であった東京農工大学のM先生だったんです。安心して日本語でお伺いしたところ、「とにかく今は外に出るわけにいかないので、対応は事務局に任せる。討論の時には前に出てもらっても結構」とのことでした。カウンターに戻って、さっきの男性に説明して了解してもらいました。実際の討論の場では、M先生が促して下さり、スムーズに進行しました。

それからこれはさきほどの、スライドを作り直した中国の男性の発表者ですが、発表は原稿を英語で読み上げましたが、討論になると、次に発表する中国の女性の発表者が突然壇上の発表席に上がって、「彼は英語が不得意なので、私が通訳します」と日本語で言って、英語の質問（会場）→日本語にサイマル社の同時通訳（イヤホン）→中国語で相談（壇上）→日本語で返答（女性）→英語にサイマル社の同時通訳(イヤホン)、で対応しました。この時びっくりしたのが同時通訳さんの英語力……さすがでした。



同時通訳ブース

司会　今回お願いした通訳さんは、評価が高かったようですね。

坂本　実は今の話にも続きがありまして……。その中国の女性ご本人の発表で、もう一度びっくりだったんです。発表の最初は英語で少しスピーチしたかと思ったら、「英語が不得手なので日本語で発表します」と、突然日本語で話し始めました。ここでも同時通訳嬢の実力にビックリ。最初の英語の部分は日本語に通訳していて、突然日本語に変わったら、殆ど遅れなくそのまま英語で通訳を始めました。それも極めて落ち着いていて、慌てたところなどは全くないようでした。これには本当にスゴイと思いました。これが第一線で活躍している、プロの通訳なんでしょうね。

後藤　論文受付のデスクでは、中国の方の英語には難渋することが多かったんですが、サイマル社の通訳の女性が、辛抱強く聞き取って、親切に応対していたのが印象的でした。またＪＴ国際企画室の、中国語に堪能な人がかけつけてくれて、私達の意志を正確に伝えてくれました。大変助かりました。

若尾　会館の事務局の部屋には、参加者の方が何かと尋ねに来られ、英語のほかに、ドイツ語、イタリア語など国際色豊かで、詳しい内容は分からないにしても、個人的に国際感覚が大いに刺激されました。

事務局におられた女性通訳のＴ博士は、先ほどから話に出ているサイマル社とは別の、ドイツに住んでおられる日本の方で、パーティーなどの司会の通訳もされました。事務局で外国人の応対をする時には、まずどこの国の方かを尋ねて、ドイツ語なら通じるか、フランス語なら通じるか、何カ国語かを話して確かめてから、会話を始められていました。５カ国語を話せるそうで、ドイツ在住とはお聞きしていても、やっぱり驚いてしまいました。

パーティーでは、外国から参加されている方たちに、日本の文化や伝統に親しんでもらえるように、いろいろと趣向を凝らした出し物が企画されていましたので、司会の中でそれを英語で紹介する原稿作りが大変な様子でした。私も参考文献を見ながら原稿作りのお手伝いをしましたが、忙しい中の楽しいひとときでした。

司会　講演の同時通訳のために、通訳さんもだいぶ勉強されたようですが……。

後藤　国際学会やシンポジウムの同時通訳は、あらかじめその会議の講演内容とか専門的な言葉を予習するのが普通で、主催者側もそれに協力します。今回私達が用意した資料は、専門用語の英和対訳集と、論文全文のコピーと、口頭発表用のメモと、発表で使うスライドのコピーなどでした。

専門用語の対訳は前年の夏頃から、発表要旨の中の用語を拾い出して、専門の先生と相談するなどして作りました。口頭発表用のメモでは、日本人講演者には和訳も付けるようにお願いしたんですが、協力してくれたのは少数でした。スライドの写しは、発表の直前にポラロイドカメラで作りました。

シンポジウムの期間中、私は論文受付のデスクにいて、この口頭発表メモの受付と、スライドコピーの調達もやりました。しかし口頭発表のメモは、用意してきた人は誰もいない有様で、ある日本人の講演者は、「スライド以外に口頭発表メモまで出せとは、ずいぶん講演者に面倒をかけるシンポジウムですね。」と皮肉を言っていました。

しかし、不完全ながら幾通りもの方法で事務局が同時通訳に協力したことは、無駄ではなかったと思います。３日目だったと思いますが、講演の始まる30分前頃に、同時通訳の方が渡した資料を持ってやって来て、自分の担当する講演の中の用語と意味を私に尋ねながら、懸命に勉強していました。そしていよいよ講演時間が近付くと、「では頑張ります」と一礼して会場に去って行きました。私もその時、やるべきことをやって良かったと満足感がありました。

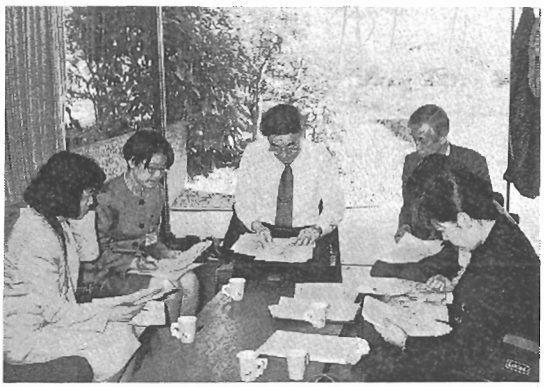
シンポジウムが終ってから後で、録音テープを聞いたり、出席者の話を聞いたりしたところでは、同時通訳は特別優れていたとまでは言えないまでも、誤訳はあまりなく、皆熱心にやってくれたという良い評価でした。私自身の感じでは、一般の

国際学会と比べて見劣りはしなかっただろうと思っています。

岡部　シンポジウムの期間中は、大会会長と副会長に、１人ずつサイマル社の通訳が付いていました。

私の担当は大会会長の世話係りで、会長付き通訳のＹさんに対して、必要な指示をすることが主な仕事でした。当日のスケジュールを伝えて、海外の要人との通訳を円滑にしてもらうために、毎朝ミーティングをしました。

初日のミーティングには、副会長付き通訳の２人も加わりました。ひととおりの打合わせが終わったところで、日本や外国の製塩方法について質問されました。「塩の国際会議をお手伝いするので、製塩の予備知識を持ちたい」とのことです。私は幸い、塩工業会のヨーロッパ塩業視察団の記事が載っている「そるえんす」を持参していましたので、写真や図を見せて概略を説明しました。また日本のイオン交換膜製塩法の話もしたところ、参考になったと喜ばれました。思いがけないところで「そるえんす」が役立ちました。


通訳とミーティング

会長付の通訳は、ほとんど絶え間なく随行しているので、スケジュールの合間を縫って休憩や食事をしなければなりません。スケジュールの修正とか食事などの時間帯をなるべく早めに知らせるように努めました。最終日に印象を聞いたら、他の国際会議の経験と比べて、情報が多く仕事がやりやすかったとのことでした。

これは後日談ですが、シンポジウムが終わった翌日に、会館の近くのホテルで、世界の政治家の方々が集まる、いわゆる「賢人会議」が開かれました。日本の元首相のＴ氏の側に、会長付きだったＹさんが付いているのがテレビに写っていました。優秀な女性だとは思っていたのですがとても控えめで、そんな第一級の通訳さんだったのかと驚いてしまいました。

パーティー・交流

印象的だったマナーの良さ

――意志疎通の満足感は今いち？

司会　それでは話を次に進めたいと思います。今回のシンポジウムでは、研究の発表や討論もさることながら、世界の皆さんとの交流にも大きな意義があったと思いますが、その舞台の一つ……パーティーについてお願いします。

若尾　参加者の方たちの中には、ご夫婦や家族連れでの来日は初めての方も、たくさんあったように見受けられました。どのパーティーの催しもとても盛り上がって、満足していただけたと思います。ＪＴのガラパーティーで阿波踊りの時には、一緒に踊りながら心の通う交流が生まれたのではないでしょうか。とにかく、皆さん楽しそうでした。

この次にシンポジウムが開催されるまでにはまだ数年あって、その間には研究も進むでしょうし、「塩を取り巻く状況」も今とかなり変わっていることでしょうが、この京都で開かれた時のことが、春らんまんの京都――つまり日本――と一緒に、

いつまでも参加者の方々の心の中に、印象深く残っていくことと思います。

司会　ＪＴのガラパーティーには、水野社長もお見えになりましたね。

加藤　パーティーの前に、水野社長が会議場を回られるとのことでした。午後４時頃でしたか、慌ただしかった人の出入りも途絶えて、ほとんど人気のない事務局の部屋で片付けをしていますと、突然水野社長が、塩本部の方達と一緒にお見えになりました。誰もいないので素通りされるとばかり思っていたので、慌てました。丁重な労いの言葉をいただいて……、大感激でした。

事務局員を労うJT水野社長

司会　パーティーではそれぞれにどう特徴を持たせるかとか、どう楽しんでもらうかといったご苦労があったと思いますが……。

吉岡　歓迎パーティー、バンケット、ＪＴのガラパーティー、送別パーティーと４回のパーティーがあったので、中身にはいろいろと苦心しました。とくにアトラクションは、それぞれの会場の国際会館と都ホテルから、出し物のリストをもらって、その中からパーティーの性格とか全体のバランスを考えて、多少のアレンジも相談しながら選んでいきました。

こうやって手作りで企画しますと、骨は折れますがそれだけ心のこもったものになって、喜んでいただけたように思います。そのほかに、企画をプロに依頼すると莫大な企画料をとられるところを無料で済みましたので、その分経費をパーティーの料理などに振り向けられるといった余禄もありました。

参加者も一緒に阿波踊り

林　実はパーティーの時に、参加者の手荷物を各自管理にするのか、事務局で一時預かるのかで、事務局では何日も大議論になりました。

なにしろ何百人もの大勢で、しかも皆同じコングレスキットなので、各自管理にしたら間違い易い。トラブルが起きたら、せっかくの国際交流に水をさすことになるという意見と、現実の問題として、言葉の問題もあり、短時間で対応することは難しいという意見とに分かれました。

ほかのシンポジウムを見学するなどして検討しましたが、これはといううまい方法が見つかりませんでした。結局現場でのスペースの問題もあって、荷物の置き場所を決め、荷札とサインペンを用意して、各自管理にしてもらいました。

結果は「案ずるより生むが易し」で、何のトラブルも間違いもありませんでした。ホッとすると同時に、皆さんのマナーの良さに感心もしたことでした。

大久保　オランダの農業センターの方に、日本の印象などをお尋ねしたところ、「日本は素晴らしい。このシンポジウムにはこれまで何度か参加しているが、これ程までにvisitorを歓迎してくれたのは、日本が初めてだ」とおっしゃっていたのが印象的でした。

田口　やっぱり文化の違いを感じたのは食事でした。まず一般的に、日本酒は飲めないようです

ね。独特の香りを受けつけないようですから、納豆はおろか味噌も食べられないかも。のり巻きの海苔はブラックペーパーなんでしょうね、きれいにむいたりして……。ただ寿司は大勢の人が食べていたので、世界的にもおいしい料理なのかも知れませんね。

料理にはつい固定観念がつきものですが、もし外国へ行ってマグロや鰹の塩焼きが出てきても、怖じけないようにしておきたいものですね。

杉本　都ホテルでのバンケットで、フランス料理のフルコースを食べられるだけでも嬉しいことなのかも知れませんが、本音をいいますと、緊張していたせいもあるのか、全然美味しいと思いませんでした。自分が料理したわけではないのですが、何となく責任を感じてしまいました。

と言うのは、シンポジウムの始まる前に、事務局を代表（？）して、私も都ホテルへ試食に行きましたが、その時は確かに美味しくて、「あれだけ美味しければいいんじゃないですか」と報告した記憶があるからです。そのあたりのことが頭をよぎりました。

バンケットではもう一つありました。前の晩に、バンケットに出席する人達のうち、150人ぐらいの席を指定するらしいという話を耳にし、現場ではどういうように対応しようかと思って、交通公社のスタッフの意見を聞きました。交通公社の人が「何人で誘導するのか」と尋ねるので、「誘導係は多分５人ぐらい」と答えますと、「入場するのに２～３時間ぐらいかかるから無理でしょう。常識的には席の指定は20～30人ぐらいが妥当です」と言われました。そのうちに事務局のＨさんも加わって議論しましたが、150人も指定したら、バンケットは失敗するという結論になりました。困ったことになったものだと、２人で頭を抱えていたところ、最終的に座席指定は20～30人ということになって、ホッと一安心した次第です。

小林　バンケットでは、入場と退場とが難問でした。

入場では、舞台に近い前列から、空席を作らずに、順に着席していただくことが必要でした。ホテル側の話では、料理は列ごとに出していくので、空席があると配膳がスムーズにいかないということでした。一方参加者のことを考えると、ご夫妻や仲間の方で、同じテーブルに着きたいというご希望にも応える必要がありました。

当日の夕方まで、参加申込やキャンセルが相次ぐ中で、この両者を満たすために知恵を絞った方法が、会場の入口で、先着の方からテーブル指定の席札を渡すやり方でした。もちろんご夫妻やグループの方々には、同じテーブルになるように、確認しながら席札を渡しました。おかげで目論見通りに席が埋まっていき、バンケットの進行もスムーズにいきました。中には外国の方達の中に日本人がたった一人で、ご苦労をされた方もあったようですが、結果的には新しい友人ができたと喜ばれ、ホッとしました。

次の難問は退場でした。ホテル側からのアドバイスでは、外国人が参加する400人以上の宴会になると、お開きになってもなかなか席を立たない方が必ず何人かはいて、退場が終わるのに１時間くらいはかかるとのことでした。

そこでホテル側とも相談して、その対策を綿密に練っていたのですが、結果はここでも「案ずるより生むが易し」でした。

司会が閉会を告げると、それまで音楽に会話にと楽しんでいた皆さんが、一斉に整然と退場を始

都ホテルでのバンケット

めて、全員が退場するまでに10分とかからず、ピシャリ定刻に終了しました。ホテル側でも「今日のお客様はマナーが最高」と、ビックリしていました。お世話している私達までが褒められているようで、この時ばかりはこちらの気分も最高でした。

成田　バンケットの晩は、私達も会館でわりと豪華な食事を出してもらえたんですけど、やっぱりなんとなく寂しくて、ホテルに行った人たちがうらやましかったですね。

そのほかの日も、夜はごくおとなしくしていました。緊張のせいか疲れましたし、「また明日がある」と思うと、皆さんとの交流もあまりできませんでした。パーティーでも、上司や諸先輩方から「外国人と交流してこい！」と、散々気合をかけられたんですが、何となくおっくうでただ会場内をぶらぶらしていました。いま思えば、「ちょっと年寄りくさかったかナ？……」と、反省しています。

古俣　今回のシンポジウムでは、出席者にとっての関心や期待は、塩の研究の新しい成果に触れることばかりではなくて、発表者とのコンタクト、さらに言えば「塩事業関係者の国際規模での人的ネットワークづくり」に集まったのではないかと思います。

そうだとしたら、歓迎レセプション、バンケット、ＪＴ招待パーティーは、会場・食事・催物とも大変立派ではありましたが、それらのパーティーが「人的国際ネットワークづくり」にどれだけ寄与したのか、もう一度振り返って考える必要があるのではないでしょうか。

例えば、３回のパーティーで、いつも同じような顔ぶれで塊まっていなかったかどうか。一人でポツンとしていた人はいなかったかどうか。非英語圏からの参加者への対応は十分であったのかなど……。もとよりパーティーでの人的ネットワークづくりは、参加者個人の意思によるものですが、主催者側のサポートがもっとあってもよかったと思います。

例をあげれば、パーティー活性化チームを編成する方法があります。チームメンバーがそれぞれパーティー会場でのテリトリーを持ち、会話や交流の活性化を促すよう働きかけるというアイデアもあるでしょう。

ふざけたバカ騒ぎをする必要は全くありませんが、参加者すべてが、より多くの人とより深く、より楽しく、パーティーのひと時を過ごせるようにする企画は、いくらでもあるのではないでしょうか。

小橋　私の感じでも、日本人同士、外国人同士のグループができてしまい、また、外国人同士でも、英語圏の方同士とか、中国人同士、アジア人同士みたいな感じで、これまたグループができていました。やはり顔見知りでない限り言葉の問題もあって、なかなか同国人同士のように、初対面で自己紹介し合って、何とか話題を見つけて会話に移っていくのは難しいことを再認識しました。

私も思い切って、下手な英語でジェスチャーを交えて、何人かの外国の方に話かけて見ましたが、余りうまくいかなかったんです。自己紹介のあと相手の国のことなり、日本に来た印象なりを聞いてみましたが、相手から予期しなったような質問をされますと、会話能力不足から充分に応対できなくて、立往生して困ることがたびたびありました。ＪＴの若手の中で、かなり活発に外国の方と会話をされていたのは関東のＳさんで、私も一度話の中に加わりましたが、インドの方の喋るスピードが早くて、ほとんど理解することができませんでした。唯一、うまくいったのは、刺身や寿司などの日本料理の食べ方を、身振り手振りを交えながら、ヨーロッパからきたカップルに教えた時ぐらいでした。

最後の送別パーティーでは、オーストラリアのＷさんという、天日製塩における微生物被害について発表された方に、会話をトライしました。この方のスライドは私が担当したので、スライドが美しく話が興味深かったという話から入ったところ、途中から日本の住宅が高いという話になり、私の住んでいる広さの家なら、オーストラリアに来れば、車１台分のお金で手に入ると言われまし

た。この方は、私の下手な英語でも、一所懸命に耳を傾けて、話を盛り上げる努力をしてくれていることが肌で感じられたので、もっと英会話を身に付けておくべきであったと痛感しました。

岡部　私はオランダのB氏と、お知り合いになる機会に恵まれました。名刺交換をしたところ、名刺が日本語で印刷してありました。訪問国に敬意を表して当然のことなのかも知れませんが、とても親近感を覚えました。

私は勇気を出して、「勉強不足でカタコト会話しかできません」と言ったら、「こちらは日本語も勉強しないで、日本にやってきました」との返事です。返事の方は、通訳して貰ったのですが……、冷汗をかきながらの応対でした。その時に、彼を囲んで写真を撮ってもらいました。

最終日のお別れパーティで、彼がヨーロッパを代表してスピーチに立って、「次回のシンポジウムについて話します……」と話された時には、本当にびっくりしました。そんなに偉い方とは知らないで、平気で接してきたことが恥かしくなりました。しかしこんな機会は二度とないものです。いい思い出になりました。

司会　今のお話のお別れパーティーも、意外にというか、たいへん盛会でしたね。

小林　会館の担当者から、これまでの経験では送別パーティーに出席するのは参加者のごく一部で、それも早々に帰られるので、考えておいた方がよいという、親切なアドバイスを受けていました。

そこで世界各国のビールを用意して、さわやかな送別会になるように、演出を考えていました。

ところが実際には、ほとんどの参加者が最後まで残られて、しかもワインの注文が多く、予想外に和やかな雰囲気で、盛り上がったパーティーになりました。事務局側としては、嬉しいやら予算の事が心配になるやらで、複雑な心境でした。

ここでも、先ほどバンケットで話しましたように、お開きのあとの退場がとても整然としていて、お客様のマナーの良さが、最後までたいへん印象的でした。

交流にも反映した「アジア」での開催

――情報収集の意欲には脱帽

司会　パーティー以外でも、いろいろと交流があったようですが……。

後藤　以前に中国に製塩技術の指導に行かれた日本の教授が、講演の合間に別室で中国の方たちと懇談されて、先方の研究について熱心に耳を傾けておられました。こうしたことで、シンポジウムに参加した中国の方も、おそらく気分よく帰国したことと思います。

中村　私はトルコ専売の技術者の、Eさんという方とお知り合いになれました。トルコからただ1人の参加ということもあって、何かと事務局に立ち寄られて……、親しくさせていただきました。

トルコでは食用の塩には主に海水塩を使って、工業用などには塩湖の塩を使うとのことで、Eさんは、海水塩の生産を担当されているとのことでした。このシンポジウムには、世界各地の塩の製造技術を勉強するために参加したと言っておられました。

トルコはご存じの通りイスラム教の国ですが、お酒は自由に飲めるとのことで、パーティーでは一緒に楽しくお酒を飲ませていただきました。送別パーティーが終わった後で、イスラム式の抱き合ってお互いに両頬を擦り寄せるという、日本人にとっては少々大袈裟な感じのするご挨拶をしてお別れしました。

別れ際にEさんが言われた、「日本人とトルコ人は同じアジア人だ」という言葉が印象に残っています。日本人も、こうしたキザともいえる言葉を、サラッと言ってのけないといけないのかなと感心させられました。

加藤　私が初めて外国の方と接したのは、インドのRさんでした。開会前日の日曜日のまだ早い時間に事務局にお見えになって、Hさんと話をされていました。コーヒーをお出ししますと、両手を合わせお辞儀をされ、お帰りの時もまた丁寧に礼をされました。それから毎日必ず1度は、事務

局に顔を出されました。お体の大きな、特徴のあるお顔をされていましたので、ほとんどの方が印象に残っておられるのでは……。

お別れパーティの時に、庭園で写真を撮ってもらったりおしゃべりをしていると、Nさんと一緒に近寄ってこられて、「マダムいろいろ有難う。毎日お茶をいただいて、本当に嬉しかった。とても感謝しています。」とおっしゃって、インド式の礼をされ握手を求められました。とても大きくて、温かい手でした。

中村　R博士は、SRM Pushpam自治大学の、動物学部の部長とのことでした。飾らない人柄もあって、ドクターに対して失礼ながら、私達は自然に「Rさん」、「Rさん」と呼んでおりました。

Rさんは、来日されてすぐにイスラム寺院に行きたいと言われるほど敬虔なイスラム教徒で、神戸にある寺院への道筋や交通機関をご案内したことから顔を覚えていただき、その後何かと声を掛けられるようになりました。

Rさんは、講演資料や展示会場のカタログなど、手に入る資料は大変熱心に集めておられました。その理由を伺うと、世の中のこと、とりわけ科学技術の進歩は目覚ましいものがあって、どんな物でも持ち帰って役立てることができるとのことでした。さすが科学者、知的好奇心に溢れているなと感心させられてしまいました。

物や情報が溢れている日本に住んでいて、科学する環境としては恵まれているけれども勉強しない自分としては、大いに反省……でした。

Rさん以外にも、インドからはたくさんの参加者が見えていました。中には「転職のために、このシンポジウムに参加した証明書を作って欲しい」とか、「車海老の輸出をしたいが、どこか輸入業者を紹介して欲しい。何だったら君に輸出代理権をやっても良い」とか、応対に困るようなことまで持ち込む人もあって、残念ながらインドでの食塩の製造や流通などのお話は、聞きのがしてしまいましたが、おかげで大変楽しい思い出をつくることができました。

同伴者プログラム・見学会

ひとりで支えた見学ツアー

――献身が呼んだ参加者の共感

司会　それでは次に、同伴者プログラムと見学会に、話を進めさせていただきたいと思います。まず参加者の夫人や家族の方の同伴者プログラムについて、吉岡さんいかがですか。

吉岡　同伴者プログラムのコースを決めるために、事前に現地に行きまして、いろいろ実際にコースを回ってみました。事務局としては、外国の方には、できるだけ多くの場所を見ていただきたいという気持ちがありましたが、実際に外国の方達と交流の機会が多い先生方に相談しましたところ、沢山の場所を急いで回るよりも、一カ所ごとに充分にゆとりをもって見てもらうように、コースを決めた方が良いというご意見でしたので、1日に4カ所ほどにして、最もポピュラーな場所を選びました。

それでもやってみて、若干強行軍だったかなと思っていますが、参加者には初めての方が多かったので、場所の選定は良かったのではないでしょうか。予定時間内で回ることができましたし、桜の花を充分堪能できたと思いますので……。

長谷川　パーティーや同伴者プログラムで、海外からの夫人や家族の方に対応していただくために、大会会長や副会長をはじめ数人の大会役員の奥様方に、ご協力をお願いしました。場所が京都ということで、何かと不自由なホテル住まいでのお支度など大変だったと思います。おかげでご夫

同伴者ツアー中の大会役員ご夫人方（金閣寺にて）

妻での交流など、海外からの参加者の方々にはたいへん喜ばれましたが……。

司会　岡山への見学ツアーは、手違いがあったり、時間に追われてのお世話で大変だったようですね。

宇野　英語のヒヤリングもスピーキングもできない私が、見学先のナイカイ塩業が、私が勤めているセンターの域内にあるという理由だけで、ツアーに同行することになりました。

宿泊先のご配慮で、前日に予め部屋に用意していただいたトーストを食べて、出発の30分ほど前の7時ごろに、会場からさほど遠くない交通公社が設定したホテルに徒歩で行きました。前日に交通公社から一応ツアー参加者名簿をもらってはいましたが、集まってくる人の名前も違っていれば、人数も違っています。

一方、京都駅を出発する新幹線の時刻は、8時29分で動かすことはできません。京都市内の各ホテルに宿泊しているツアー参加者を、2台のバスで巡回して、京都駅近くの新都ホテルに一旦集合してもらい、人数を確認してから、新幹線に乗車することになっていました。

私の乗ったバスは、3～4カ所のホテルを回って参加者を集めましたが、交通公社の添乗員も、当日キャンセルがあったかどうかまでは把握していません。1人も参加者がいない所もありました。各ホテルでのバスの出発時刻は極力守りながら回って、新都ホテルに着きました。ところがもう1台のバスは、渋滞にかかったのか、名簿どおり人が集まらなくて遅くなったのか分かりませんが、なかなか来ないんです。

8時か8時5分前頃になって、私は、もしかしたら京都駅に直接行ったのではないかと、1人で走って駅まで見に行きました。すると途中で、前日展示会場で見かけたインドのご夫妻にお会いしました。「ツアーに行くのですか」と尋ねたところ、「行く」というではないですか。そこで、他にも京都駅にいるのではないかと思って、そのご夫妻を伴って駅に行きました。

案の定、アジア系の方が2人いました。私は実は台湾の人かな？と思って、「ナイカイツアーに行くのですか」と尋ねましたところ、日本語で「行く」というではありませんか。その方は「ホテルでいくら待ってもバスが来ないので、タクシーで来ました」と、すごい剣幕でした。取りあえず簡単にお詫びして、例のインドのご夫妻と一緒に改札口のところで動かないで待っていてほしいと頼んで、本来の集合場所へ連絡に戻りました。戻る途中で駅の方に歩いて来る一行と会いました。

司会　集合の時から大変だったんですね。

宇野　添乗員に、私は何をすれば良いのか尋ねました。「取りあえずツアー参加者がはぐれて迷子にならないように、人数だけこまめに数えて欲しい」とのことでした。

京都駅の改札を通る時、36人をカウントしました。次にエスカレーターでホームに上がる時にもう一度カウントしたところでは、確かに36人いました。ところが新幹線に乗った時、全員指定席だったんですが、いくら数えても34人しかいないのです。席が2つ余っていました。ホームに残して来てしまったかと、責任を感じてしまいました。

1時間半ほどで岡山駅に着きました。改札を通ってバスセンターに待たせてあったバスに乗りましたが、やはり人数は34人でした。ところがバスが出発する間際になって、2人が大急ぎでバスに乗り込んで来たではありませんか。私はこの2人がどうやって来たのかと、今でも不思議に思っているんです。1便あとの新幹線で来たのだろうか、切符代はどうしたのだろうか……。とにかくバス

は、瀬戸大橋の見学に向かいました。

瀬戸大橋の中ほどにある寄島で、昼食を摂りました。魚介類のバイキングでしたが、生きている車海老が熱い鉄板の上で飛びはねて、鉄板から外へ出てしまったからさあ大変。余っていたお皿か何かで、蓋をしましたところ“Good idea!”です。外国人のユーモアには感心しました。

昼食の後少しばかりの自由時間があって、ナイカイ塩業へ出発する時刻になりました。例のように人数をカウントしました。何回数えても35人しかいません。みやげ物売場の方へ捜しに行きましたが見つかりません。他のツアー参加者も捜してくれました。20分も捜したでしょうか。みやげ物売場の外の、海の方へ行ってみますと、まさに捜していたモロッコの方が、地中海（瀬戸内海）に見とれていました。

ナイカイ塩業の工場見学は、英語の堪能な社長の説明で、質疑もいくつかあったようですが、短くなった見学時間もクリアーして満足してもらえたようです。

見学も終わり、ナイカイ塩業さんを定刻に出発して岡山駅に着きました。新幹線の出発までに20分ほどありましたので、参加者がみやげを買ってもよいことになりました。個人的には、迷子が出ないだろうかと気になりました。集合の時刻になり、まだ買い物をしている人もありましたが、集合してくださいと英語で話したところ、分かってくれたらしく改札の方へ集合してくれました。

その頃となりますと、私が「いち、に、さん、……」とカウントしますと、参加者も「イチ、ニ、サン、……」と声を合わせてくれるようになりました。

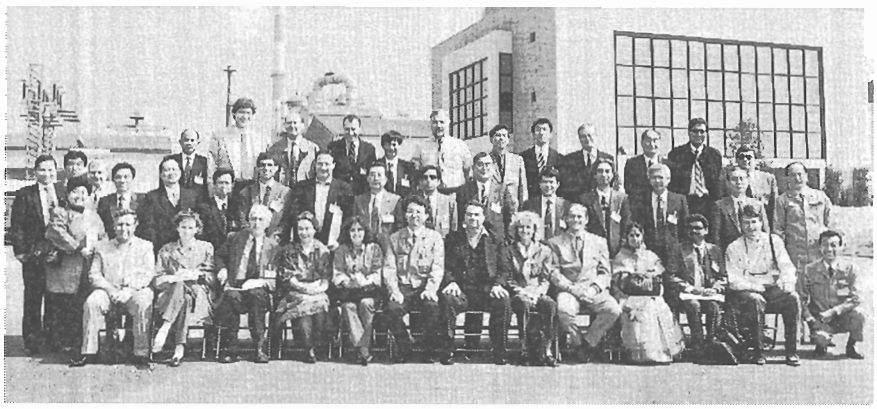
日本人の気忙しいのもさることながら、初めに危惧していたように、日帰りの強行軍で、人数や参加者など未確定なことが多い中で、われわれの知らないところで迷惑をおかけしたことも、多分にあったのではないかと思っています。なにはともあれ36人全員が、少なくとも京都駅には戻れたものと確信しています。

司会　本当にご苦労様でした。昼食に注文が出たのは、２回目の岡山ツアーでしたか。

中村　私は会期明けの２回目のツアーに、同行させていただきました。当日京都を発つ時は、雨がシトシトと降っていましたが、本四架橋の見学や、ナイカイ塩業さんのプラントを見学する時には雨も上がって、無事ツアーを終えることができました。ただ、雨のために若干旅程が狂って、折角のナイカイ塩業さんでの見学時間が、短くなってしまったのは残念でした。

このツアーでも、昼食を本四架橋の寄島のレストランで取りましたが、その時に私自身初めての経験だったのですが、インドからの菜食主義者の方々のお世話をすることになりました。

コースに組み込まれていた昼食は海鮮料理だったのですが、インドからの参加者の中に、「自分は菜食主義者なので、肉や魚などの生き物を使った



ナイカイ塩業㈱見学の一行

食べ物は、一切ダメ」と申し出た方々があって、慌ててしまいました。お話を伺うと、卵を使っているマヨネーズもダメという方、卵は大丈夫という方がおられる一方、「自分は菜食主義者だけれども、用意された昼食は珍しいので、今日は菜食主義者は休みだ」という方などさまざまでした。結局レストランにお願いして野菜サンドを作ってもらい、その場を取り繕うことができました。

全く予期もしなかったことでアタフタしてしまいましたが、良い勉強になりました。おかげで、瀬戸内海の新鮮な魚介類を食べ損ねてしまったのは残念……。後日再チャレンジする積もりでいます。

司会　林さんは京都の現場で奮闘したあと、東京までの長距離ツアーに同行されたそうで……、ご苦労様でした。

林　大会も無事終了して、やっと我が家へ帰れると思っていたら、最後の行事のテクニカルツアーに同行するよう言い渡されました。このツアーは、成田から出国する参加者に、京都からの道すがら、日本の代表的な産業の自動車工場を見学してから、これも代表的なリゾート地の箱根で一泊して、観光しながら都内のホテルまで行ってもらう企画でした。

ツアーとか輸送の関係は、ＪＴの関西工場の見学以外は、全面的に交通公社の担当になっていましたが、特にこのツアーには、ベテランのガイドのほかに交通公社のスタッフが同行しましたので、私が全責任を感じなくても済む恵まれた仕事でした。何かのためにと買ったカメラを携えて、出発しました。

全員が、定刻までには待ち合わせ場所に集合しました。老若男女、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカといろいろな国籍の人が、40名近くも参加していただきました。トヨタ自動車の製造ラインの見学では、同社の妙齢のバイリンギャルが、手際よく説明していました。私の近くにいた人は、「どんな車に乗っているのですか」と質問され、さりげなく「メルセデス」と答えていました。もう１人は「ジャガー」とのことでした。私は「ホンダ」とだけ答えておきました。昼食にはトヨタ側で、時価数千円はすると思われる幕の内弁当を用意していただきました。トヨタの世界戦略なのか、うちの上司の根回しの良さなのかなどと感心しました。

箱根では、前日からの雨も上がり、朝からの霧もお昼ごろには晴れて、皆さんからやっと歓声らしいものが上がってホッとしました。道中気がついたことがあります。参加メンバーには夫婦連れが多かったのですが、皆さん手を組んだり、肩を抱いたり、旦那さんが奥さんに実に優しいのです。出発の迫ったバスに乗る時でも、夫婦で悠々と近付いて来て、お互い片方を急がせることもなく、旦那さんは奥さんの横にちゃんとついていて、先に車内へ奥さんを乗せます。実にさりげなく自然にやっておられる。我が身を思うと……、文化の違いと納得するしかありませんでした。

都内のホテルに夕刻に到着して、参加メンバーの方に「ナイス・コーディネイト、ドウモアリガトウ」と言われ、お世辞でも嬉しく思いました。

その他のハプニング・感想など

思い出尽きない舞台裏

――「事件」で蓄積したノウハウ

司会　それでは最後のパートになりますが、35もの国々から集まったのですから、いろいろなハプニングや、舞台裏での出来事などもあったと思います。また折りに触れて、感慨といいますか、感じられたことがあろうかと思います。

今までのお話も大体そういったお話だったよう

に思いますが、そのほかにありましたら、場面を限らず思いつくままにお願いしたいと思います。先ずはハプニングのお話からお願いします。

杉本　会場の事務局に外務省から電話が入って、「トウ（唐）という中国の人がいると思うが、探して欲しい。」とのことでした。データベースを使って探すと、トウさんは１人しか出て来ない。おまけに唯一出て来たトウさんという人は、ＪＴの人で私が知っている日本人なんです。これは困ったなと考えている内に、唐という漢字は中国語ではトウとは呼ばないんじゃないかと思い付きました。このデータベースはすべてアルファベットで入っていて、漢字での検索ができません。

ＪＴから中国語の応援で来ていたＴさんに聞こうと思いましたが、ファミリープログラムに出かけていて、いませんでした。しかたなく中国の方に聞こうと思って探しているうちに、日本語のできるＳさんを見つけました。

このＳさん、本人は自覚してはいないでしょうが、実は私の仕事を３倍ぐらいに増やしてくれた人だったので、私はよく覚えていました。今度は私の番とばかり、彼に唐という漢字は中国語で何と読むか尋ねると、しばらく考えてから「ダン」と「タンク」と教えてくれました。外務省も知らないのかなと思いながらデータベースで探すと、結局キャンセルをした人でした。

長谷川　当初からある程度は予想していましたが、発展途上国からの来日は、外貨やビザの関係で非常に困難で、先方の要望に応えるのに苦労しました。身元保証書、誓約書、日本での行動計画書、本人の経歴書などを、全部こちらで作ってあげましたが、そのために先方にいろいろと問い合わせなければなりませんでした。

ところがファックスが夜中までかかっても通じなくて、翌朝電話をかけますと、英語が分からない人が出て電話を切られることもしばしばでした。中国へ電話をした時などは、先方が「ウエン、ウエン」と応答しますので、「It is 9o'clock in Tokyo.」と答えましたら、ガチャーンと電話を切られてしまいました。後で「ウエン」とは、中国語で「もしもし」という意味だと知りました。

後藤　大会開催の前日、４月５日の夕刻のことです。会議場の事務局控室に電話がありました。たまたま居合わせた私が受話器を取ったところ、神戸に住む中国人と名乗る人からで、「中国からのシンポジウム参加者を数人連れて、今京都駅に着いたが、まだ宿泊予約をしていない。今夜からのホテルを何とか世話して欲しいので、今から会議場に行きたい。道順を教えて欲しい。」ということでした。そこでその参加者の名前を聞いて、登録簿を見ましたが記載されていません。

これは事務局としてはどうにもならないと思いましたが、幸い会館には翌日からの準備のために残業していた交通公社の人がいましたので、一行が到着した後の応対を頼んでおきました。翌朝聞いたところ、その人たちは首尾よく宿泊できたとのことでした。

杉本　ホテルといえば、事務局で用意したホテルに、宝が池プリンスホテル――略して「宝プリ――と、京都プリンスホテル――「京プリ」――がありました。名前は似ていますが値段はかなり違い、中身もそれ相応に……だったようです。

先ほども話に出ていました、オランダのＳ博士の奥様で、事務局での準備を手伝っていただいたＫ夫人が、「『プリンス』に××××円で泊まれるのは安い。ダンナに、すぐそのホテルにするようにと言ったのよ。」と言っていました。

確かにＳ博士は、「京プリ」に予約を入れていました。事務局のＹさんから、名前は同じ「プリンス」でも、中身は全く違うと聞いていましたので、ひとこと言おうと思いましたが、余計なお節介かなと思って、黙っていました。会議が終わった後でＫさんから、「名前が似ているので失敗した。」と言われて、あの時にひとこと言っておくべきだったと後悔しました。

後日、たばこ弘済会のＦさんと話をしていましたら、ガラパーティーの司会をした、コマーシャルの “It's a Sony.” の声などで有名なＳ氏も、京プリに泊められたらしく、その晩にＦさんをつかまえて、さんざん苦情を言っていたようです。Ｆ

さんは「まあ、飲め。」と言って、朝の3時頃まで付き合ったそうです。Fさんご苦労サマでした。

長谷川　先ほどの中村さんの話に出て来たトルコの方の話に関連するのですが……。日本に入国する時に、ビザが必要な国があります。中国、イラン、フイリッピンなどは、かなり厳しくチェックされるようです。

先ほどお話がありましたように、TEKEL(トルコ専売) はＪＴとよく似ておりまして、塩もたばこ専売と一緒の事業体で運営されています。ＪＴもトルコ葉の購入ではお世話になっているとのことで、ＪＴのアテネ事務所から、「今回TEKELの塩関係者が参加するからよろしく。」との連絡が入りました。

大阪空港に出迎えに行きましたがキャッチ出来ず、一時心配をしたんですが、ようやくホテルで連絡がつきました。本人のＥ氏は、ビザなしで来日したために、シンガポール航空の好意で――本当は、ビザなしで乗せた航空会社に、法的な責任があることになっているんですが――72時間の仮上陸許可証で入国したとのことで、実に心配そうな顔つきで訴えました。

慌てて大阪の入国管理事務所と調整した結果、参加証明書を主催者名で作成して、本人が出国の時にその書類を提出すればいいということで了解を得ました。それでもご当人は落ち着かない様子でしたが、その後TEKELからの問い合わせもありませんでしたから、無事に出国できたと思います。

イランからの参加者は、ビザなしで成田空港でストップさせられ、京都のわれわれの所まで連絡がありましたが時間的にどうにもならず、そのまま帰国したようです。

またある国からは、大量の参加申し込みがありました。結局来日しませんでしたが、不法滞在を目的にしたブローカーが、国際会議を利用することもあるという噂もありますので、全てが善意で通じるかどうか……、難しい問題ですね。

司会　会場の運営でも、いろいろあったようですね。

杉本　シンポジウムが始まる前に、国際会館内で使ういろいろな看板を製作するように頼んでありました。彼らはさすがにプロで、私の注文通りに誤字一つないものを作ってくれました。ただ一つの不安は、肝心な注文者の私が、指示間違いをしていないかということでした。

会館の中には、発表会場のほかに、いろいろな目的で使うための部屋を、いくつか用意していました。その中に、発表の場での討論が、時間の関係で充分できない時のための討議室と、論文の修正について、発表者と審査者が協議をする論文審査室がありました。

会議が始まると、この討論室と論文審査室に案内する看板が、おかしいんじゃないかという声が耳に入りました。不安的中、確認するとやはり指示間違いでした。そこで昼休みの時間に、ＪＴの方3、4人に手伝ってもらって、看板を手製で作り直しました。何とか1時間で仕上げることができました。

吉岡　会場での昼食のことですが、一般参加者用に用意する特別ランチの数を決めるのが大変でした。これは利用者数をこちらで見込んで、予め発注しなければならなかったので、その数を見込むのが苦労でした。会館側に、過去の国際会議での利用状況を聞いたりして決めたのですが、値段が1,500円と高かったこともあって、利用者が見込みよりも大分少なかったように思いました。少し足りないくらいがちょうど良かったのかも知れませんね。

加藤　展示会場の中に――私は3日目になってやっと見て来たのですが……――、日本海水学会の出版物の紹介と即売コーナーがありました。

そのコーナーは、このシンポジウムの講演集を出版することになっていた、オランダ・エルゼビア社の日本支社から派遣されていた、Ｋさんという女性が担当していました。そのＫさんが事務局に来て、「本は売りますが、代金は事務局で預かってください。」と言われるんです。私は事情が分からないので困りましたが、むげに断わるのも気の毒なので、1日分を纏めて持って来るように話し

ました。しかし彼女は、どうしても売れたらその都度持って来たいというので、事務局の金庫を借りて、売上金を預かることにしました。この金庫には、事務局のいろいろなお金や、金券なども保管してあったので、人の出入りの激しい部屋で、おかげですっごく神経を使いました。

最終日に、お別れパーティの準備でザワザワしている事務局に、Kさんが青い顔で入って来ました。「最終的に本の残数と代金が合わない。何冊か本が不足している。どうしたら良いでしょう。今日はお客様が多くて……。」と言われるんです。

仕方がないので、「学会には事情を話しますから心配しないで……。」と、彼女に戻ってもらいました。後で聞いた話では、即売する本のすぐ横にパンフレットなどが置いてあって、そこに「ご自由にお持ちください」と貼紙がしてあったとのことで、間違えた人もいたのでは……。なぜかホッとしました。Kさんの優しい京言葉が印象に残っています。

展示コーナー

杉本　総合受付や分科会に、アルバイトの女性が大勢いましたが、中でも総合受付の1人がモデルみたいだと、大変評判になりました。足評論家といわれるM氏が私の所に来て、「総合受付の机、前カバーがなかったら良かったのに」と大変残念がっていました。

仕事熱心（？）なせいもあって、私が彼女の存在に気が付いたのは、シンポジウムが終る2日前でしたが、情報を仕入れてみますと、彼女はアルバイトでモデルもやっているらしく、その方面の人達の中では有名とのことでした。美人で英語、フランス語が話せるそうで、やはり、女性は京都がBestなのかな……。

坂本　先ほど分科会場でのスライド事件では、ポケベルが威力を発揮した話をしましたが、その他でも、私はポケベルのご厄介になりました。

開会式の前に、各分科会場の責任者が、事務局の案内で各会場を見て回りましたが、途中で用事ができて列から離れたために、迷子になってしまいました。その時もポケベルでS氏を呼び出して、その列を追って行きました。相手も移動していますからなかなか追い付けないで、2～3回呼び出しをして迷惑をかけてしまったように記憶しています。

杉本　昼間の分科会や夜のパーティーが終わって、何故か私の仕事はここから始まるんです。

事務局の部屋にいますとJTのT氏が入ってきて、「廊下で何か話声がするんだけど……」と言うのです。こんな夜遅くに、会館内に人がいるわけはないと思いながら、真っ暗な廊下に出てみますと、やはり何か聞こえます。人の声だけれど、何を話しているのかは聞きとれません。

オバケ屋敷の中を歩くように、声の方へおそるおそる近付いてみました。話している言葉は英語らしい、どおりで何を言っているのか分からないわけだ……。しかし英語をしゃべるオバケに、何を言ったらいいのかなと思いながらさらに前進。よく見ると人影、しかも女性、そこで少しホッとしました。さらに顔を見ますと見覚えのある顔、会館に勤めている外国人の女性が、オバケの正体でした。

冗談半分に“You scared me.”と彼女に言いましたら、“I'm sorry.”を連発して、何か言い過ぎたかと思いました。どうやら国際電話をかけていたらしく、相手（彼？）の時間に合わせると、日本時間では常識はずれの時間になってしまうらしいのです。それにしても、照明の1つぐらいはつけておいてくれれば、これほどドギマギしなかったのにと思いながら、仕事を続けました。

加藤　朝早くから、頻繁にゴミや吸い殻を集め

に来てくれる小母さまたち、この人手不足の中、さすがに国際会館と感心していました。

「ここの人達は随分たばこを吸いますね。いつきても吸い殻が溜まってるね。」「皆さん神経使うから、この部屋に来るとホッとするからでしょうね。」と私。「それでもずいぶん吸うわね。最近では珍しいわ。」と小母さん。次の日そっと私の所に来て、「皆さん日本たばこの人なんですってね、道理で吸い殻多い筈だわ。」と納得顔でした。

コーヒーブレイクになると、たちまち事務局が賑やかになり、また静かになります。そのあと紙コップや灰皿など、乱雑になった部屋を整理していた時でした。ちょっと色の変わった紙がある、紙をとるとなんと下には灰皿が……。ドキッとしながら調べたんですが、吸い殻に火の気はありませんでした。「煙にでもいぶされたのかな？いずれにしても用心、用心！」でした。

杉本　ＪＴのガラパーティーの終わった後で、国際会館と交通公社の人達と私――ＪＴ関係者は私１人――で、何故か交通公社のブースでパーティーの続きとなりましたが、いかんせん少数派で批難はやはり事務局側に集中します。事務局の１人としては、だいたい見当はついていましたが……。そうこうするうちに上役さんたちが退席。こんどは上役さんの批難が続出。うまくいっているようでも、どこの会社も同じだなと思いながら、彼らのグチを聞いていました。

林　シンポジウムでは、ＪＴ内外のいろいろな人に協力をお願いしましたが、中でも言葉の問題には、慎重な配慮がなされていました。事務局には、英語はもちろんですが、フランス語やドイツ語が話せる人とか、中国語が話せる人も、応援として配置されていました。

最終日の午後ともなりますと、大方の日程も終って、これらの応援の人達も自分の持ち場を離れて、後片付けの準備などをしていました。私も、なんとか無事に終えるところまで漕ぎつけて、スタッフの１人としてホッとしていたところでした。

こんな時に、事務局に中国の方が訪ねて来られたので、軽い気持ちで私が応対しました。まず「どんなご用件ですか。」と聞いて、話が込み入っていそうな時には、誰か言葉の達者な人に引き継げばいいというのが、私の外国人に対する接し方でしたが、部屋には中国語を話せる人はもちろん英語の達者な人もいませんでした。

ところがこの中国の方は、英語がちょっとあやしいのです。もっとも先方も私の英語を聞いて、同じことを考えたに違いありませんが……。それでもよく聞いてみますと、「ＪＴ本社から応援に来ているＭさんに、期間中に大変お世話になった。お礼として渡したい物があるので、自分達が泊まっているホテルへ、今夜にでも来て欲しい。」ということらしいのです。しかしＭさんは今ここにはおられず、仕事の関係で、今夜にでも東京に帰られる旨を伝えようとするのですが、どうしても話が通じません。仕方なく筆談することにしました。漢字で短文を書き連ねて、何とか理解してもらいました。最初から漢字の方が、速く通じたかも知れないと思ったのは、後のこと。外国人とのコミュニケーションには、まず熱意が必要と納得した次第です。

司会　大部分の皆さんは、国際会館の宿舎に泊り込みだったんですね。

小橋　４月６日からの３日間は、会館のロッジに泊まり込むことになりました。起床は午前７時から７時半頃で、朝食を取って、８時過ぎには分科会場の受付に集合しました。分科会場の受付時間は、８時半から12時10分までと、12時50分から17時30分までで、このあと６日は歓迎パーティー、７日はバンケット、８日ＪＴのガラパーティーがありました。

私は、バンケットを除いて、すべてのパーティーに参加しました。ここで、ときどき下手な英語での会話を試みながら、夕食代わりの御馳走を食べたわけです。パーティーでの食事は確かに上品でいろいろありましたが、残念ながら上品過ぎて、量が少ないのが欠点でした。これでは腹に足りないと思った方も、多かったのではないでしょうか。私には、昼の弁当の方が良かったように思います。

バンケットのあった日は、会館にあるレストラ

ンで牛肉のステーキを食べましたが、これは肉が、しわくて硬くて、私がステーキという言葉から想像していたものとは程遠いものでした。

パーティーとか夕食の後は、外に飲みに出た元気のいい方もいたらしいですが、私は風呂に入ってから、どこかの部屋でビールを仲間と飲みながら、一日の出来事を談笑して、12時前には床につきました。したがって、シンポジウムの終わる木曜日の夕方までは、全く国際会館での缶詰め生活でした。

4日から9日までの6日間に、途中で洗濯をする気はなかったので、今回のために買った大型のスポーツバッグに、着替えの衣類とスーツ2着を入れて京都に来ました。期間中は良い天気が続いて、9日の18時ごろ、すべてが終わって京都駅に向かうタクシーの中でも、夕焼けがきれいだったように記憶しています。6日間の任務を無事終えた満足感もありましたが、気持ちはすでに高松でした。

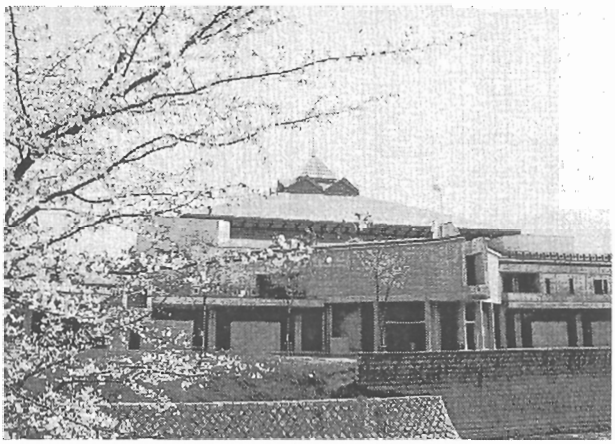
別所　今回のシンポジウムでは、事務局の方は本当に大変だったと思います。われわれ地方からの応援者は、すべての段取りが終わった後で――多分終わっていたんだろうと思いますが――、指示通りにやるだけなので、10分の1の苦労にもならなかったと思います。

私は国際会館のロッジで、事務局の人と同室でした。そこで3日間泊まったわけですが、私たちの部屋が3日3晩、宴会場になったんです。招待したわけでもないのですが、類は友を呼ぶといいますか……、毎日かなり遅くまでやっていました。それが終わって私が寝ようと思っても、1日目も2日目も、相棒は帰って来ません。そして翌朝起きて見ると、いつ帰ってきたのか隣のベッドに寝ているといった具合でした。

いよいよ明日で終わりという晩に、また同じように部屋で騒いでいますと、3日目にして初めて相棒が帰ってきたのです。そして部屋に足を入れた途端、彼の顔が青くなっていったのを今でも覚えています。しかし皆さん一向に騒ぎを止める気配を見せないのです。とうとう相棒は、喧噪の中、雑音をものともせずに寝入ってしまいました。

かわいそうに、期間中もいろいろと大変でしたね「Sさん」ご苦労様でした。

坂本　当時財団職員だった私は、毎晩遅くまで居残りをしていたH氏やS氏と付き合って、事務局室で時間をつぶしていました。会期をあと1日残した8日の晩に、それまでより少し早めにロッジに戻りますと、部屋では各地の塩業センターからの応援組が集まって、大宴会の真最中でした。一度は私も加わったのですが――自室なので、加わらざるをえなかったんですが――連日の睡眠不足のためか、急に睡魔に襲われて眠ってしまいました。1時間ほどして目が覚めてみますと宴会は終わりかけていて、よくあの中で眠れたものだと皆に冷やかされ、「イヤ、お楽しみはこれからでしょう」と言って顰蹙を買ってしまいました。



国立京都国際会館のロッジ

スタッフならではの感激も

――活かしたい貴重な体験

司会　最後に、これまでのお話の中でも伺って来ましたが、シンポジウム全体を通じての感想と言いますか、感懐のようなものがありましたらお願いします。

貞永　シンポジウムから1年以上が経過しましたが、当時の感激は今でも忘れていません。スタ

ッフとしてではなく、一般参加者としてでは、この感激はなかったと思います。というのも、スタッフというネームプレートをぶら下げているだけで、さまざまの外国の人から、いろいろなことを聞かれたからです。その対応は楽しくもあり、辛くもありましたが……。

しかし、私だけがそう思っているのかも知れませんが、役割分担がはっきりする時期が遅く、その気になる――緊張状態を作り上げる――期間が短かったような気がします。

今回、国際化の意識を持つチャンスを与えていただいて、大変ありがとうございました。この経験をどのように活かしていくかは、今後の行動次第です。何事にも尻込みをせず、積極的にいきたいと思っています。

長谷川　このシンポジウムは企画立案や運営などを、出来るだけ手作りで、身内で行ないたいと考えました。それは遠来の方々に、親身になった、心のこもった対応が出来ることと、このシンポジウムを通じて得られる経験を、貴重なノウハウとして今後の業務に活かしていただきたいとの思いからでした。

計画と実際とは違うようなことが、現地で数多く発生しましたが、スタッフの方々が、機転を利かした柔軟な対応をしていただき、無事終了出来ましたことを喜んでいます。改めてＪＴの社員の優秀さを認識した次第です。

後藤　このシンポジウムは、開催当日になって若干のキャンセル講演も出ましたが、前回までに較べてセッションの数は増え、発表件数も175件と今までにない多数にのぼり、論文集には181件の論文が採録されました。

このように盛会となったことの一因は、事務局長はじめ事務局の皆さんの努力と、審査の方々の積極的な好意のおかげで、発表論文の件数と内容の双方の充実が図られたことも、大きく影響していると思います。シンポジウムのかなめである講演発表や、論文編集の仕事に関係した者としても、この成果は嬉しいことです。

中村　会期中何かにつけて、もっと英語を勉強しなくてはと感じました。まともに英語を話せなくても、窮すれば通ずといった、めげない気持ちこそ大切だなあといった感じも持ちました。

結局、世界には英語を第２外国語とする人たちが多いわけで、彼らも自分と同じように英語には四苦八苦しているわけだから、めげることもないとも思いました。「肌の色が違っても、人の心は一つだ」などと言えるほど世の中は甘くはないし、簡単なものではないことも事実ですが、誠実さ、正直さといった「人間性で勝負だ。どんと来い」ぐらいの気持ちでいる方が、大切なことだとも思いました。

後藤　世界各国の塩関係者が多数参加した今回のシンポジウムは、私たち日本人に、塩と塩業を考え直す良い機会を与えてくれたように思います。数多くの講演論文から感じたことを２、３申します。

第１に製塩は、地域特性が強く現れる産業で、岩塩にしても、天日塩にしても、さまざまな形態があって、それぞれの業態に応じて、抱えている問題もかなり異なるという点です。もちろんどの製塩でも、食塩の分離と精製を目指して、いろいろな無機物や有機物、あるいは生物を除いていく点は共通しています。

しかし、今日わが国ではあまり研究がなされていない塩類の相律が、インドではまだ重要な課題で、副産物工業も大きな課題のようです。またドイツでは、わが国の塩業が採用をやめた加圧式製塩が、現在稼働しています。

第２は、今回塩の生理が課題として討議されたことは、大変意義深いことでしたが、これも食生活との関連になってきますと、地域的な違いが大きくクローズアップされるものと思われます。ついでながら、第５分科会の中の、食品加工での塩の利用についてのセッションでは、外国からの発表がなかったことは残念なことでしたが、このセッションは、座長のＴ先生が「そるえんす」の特集号で指摘されたとおり、「日本人の生み出した食文化の結晶」ともいうべきものであったのかも知れません。

以上のように、今回のシンポジウムで、世界各地域の特性が現れたということは、塩または塩業が、それぞれの地域の文化と密接に関わっていることになるのではないでしょうか。ヨーロッパの塩の歴史について面白い話がありました。「海の塩」と「山の塩」とが、互いに塩の市場を占有しようと争ったということです。「海の塩」とはフランスの天日塩、「山の塩」とはドイツやオーストリアの岩塩のことです。しかし今日でも両者は共存していて、両方の関係者が今回のシンポジウムにも参加しました。

わが国は、現在食料用塩の自給と日本塩業の自立を目指して、種々対策を検討しています。塩産業の国際競争力というと、私たちは、国内塩と輸入原塩とを比べて食料用塩としての比較、生産費を問題にしようとします。これは当然の検討課題といえましょうが、一方塩の文化的価値についても、この際深く考える必要があると思います。

今回のシンポジウムを通じて私は、入浜塩田からはじまってイオン交換膜製塩に到る、わが国独自の技術と文化を基にして、わが国の塩産業が、世界各国の塩業の課題に貢献するように、今後情報関連や知識関連のサービス・ビジネスに努力する途があるのではないかと感じました。

長谷川　湾岸戦争があと1年遅れていたらどうなっていたか分かりません。シンポジウムの期間中の、奇跡とも言えるお天気といい、円高も今ほど高くなく、あらゆる面で好運の女神が私達に微笑んでくれていたと思います。本当のラッキーでした。

シンポジウムが始まってからは、私自身はボーッとして、夢を見ているような状態で時が過ぎてしまいましたが、応援関係者の方々の自主的な判断とご苦労のおかげで、無事シンポジウムが終了しました。

実は大会が終了しましてからも、暫くの間は夢にうなされました。

司会　まだまだ語り尽きないと思いますが、紙面も尽きたようですので、残念ですがこれで終わらせていただきます。皆さんたいへんお忙しい中を、貴重なお話をご披露いただき、どうも有難うございました。

富士登山を案内して

丸茂　信行

昨年４月の京都での国際塩シンポジウムの会期後に、ぜひ富士山に登りたいという希望が、ヨーロッパ塩研究委員会の、Ｋ博士から伝えられました。この時期の富士登山は危険が伴うことから、ＪＴとヨーロッパ側との間で紆余曲折の末、現地で日本側が危険と判断した時には直ちに中止するという条件で対応することが決定され、当時ＪＴ本社の塩流通課に在籍し、持前の語学力を駆使してシンポジウムの応援をしていただいた丸茂信行氏に案内をお願いすることになりました。

丸茂氏は、ＪＴ本社山岳部でリーダー的立場にあるベテラン登山家で、ＪＴが登山専門家筋に人選を依頼する中で浮上したもの。シンポジウムの直後で疲労の中を、気心の知れたご友人と共に対応されました。この記事は、本誌の誌上座談会用の原稿を、本人の了解を得て、手記として掲載したものです。

「責任感ヒシヒシ」の登山前夜

ヨーロッパ塩研究委員会のＫ博士と、同行のＭ氏を案内して、会社の出張命令で登山することになるとは、夢にも思わない出来事でした。登山の直前一週間ほどは、京都でのシンポジウムへ応援に行っていたので、あわただしい日々の中で気を紛らしていられたのですが、東京に帰って準備を始めると、緊張と不安が増してきました。

昔読んだ越中立山の老ガイドの話が思いかえされたりしたものです。戦前、某宮様を立山登山に案内した老ガイドが無事帰宅した後、息子が何気なく父のザックの中身を取り出していたら、底から短刀が出てきたというもので、老ガイドは万一宮様が山中で事故に会われた時などに、その場で責を負うつもりだったのだろうと息子は父の覚悟に身を引き締めたというものです。

もちろん、時代も相手も違いましたけれど、ＶＩＰであることに変わりはなく、万一事故があったらと気の重い河口湖駅近くの旅館での前夜でした。

厳しい「冬山」の頂上付近

当日、午前８時すぎに富士吉田５合目レストハウスで結成したパーティーは、お客様２名に私の友人、そして私の４人です。友人Ａさんは、Ｎ製鉄に勤める私の山仲間で、その大きな体からしてもとても頼りになる人で、私のお願いで来ていただけてとても幸いでした。

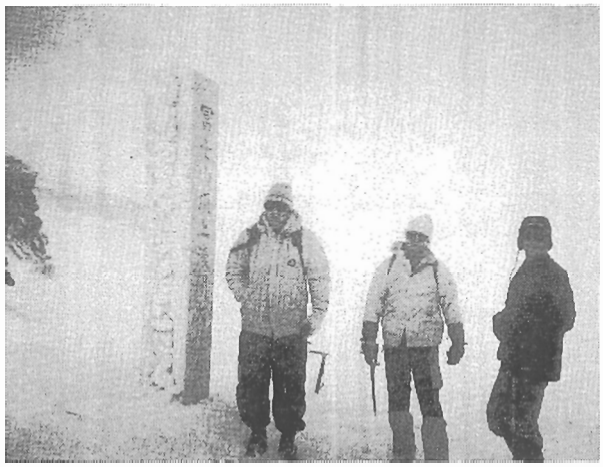
予定どおりとはいえ、出発時刻が遅すぎることが気になっていた私は、とにかく早く出発したい

一心で打ち合わせもそこそこに、5合目からほぼ水平に続く道を、6合目に向かって歩きだしました。登山姿のお人人は、さすがにかなりの経験者とお見受けしました。4月とはいえ、5合目からは標高2,300m以上の世界で、実質冬山なのです。冬山登山の場合、服装・携帯品にはとくに気を使います。衣服・靴・アイゼンはヨーロッパから持参してもらいましたが、ピッケル・ザイルはこちらで用意しました。お二人の服装を見て、装備の確認をした時に、これならまず問題なく行って来れると思ったものでした。

この頃天候は良好で、青空の下で歩き出して、ようやく落ち着きました。しばらくして登山道の案内板が立っていたので、その前で今日の登山計画をピッケルで案内板を指しながら説明しました。拙い英語ではあっても、登山という目的がはっきりしていますし、用具も登山方法もほぼ世界共通ですから何とか通じるので、その点嬉しくなったりしました。間もなく6合目に着き、いよいよ頂上めがけてほぼ直線的に登りが始まります。6合目から頂上まで、7、8、9合、頂上と進むわけですが、各合目の間は均等ではなく、この富士吉田ルートの場合、とくに7～8合目間が長いのが特徴です。

7合目を過ぎたあたりから天候が崩れ始め、地吹雪となり気温も下がってきました。それでも冬山登山としてはそれほどのことでもなく、あとは体力勝負です。4月という時期は、冬山とも春山とも言えない中途半端な時で、その日の天候次第でさまざまに条件が変わります。

視界が悪く強風が吹く中で、休憩もままならないというのは、せっかくヨーロッパから来られたお二人には気の毒な気もしましたが、登山家なら分かってくれるものと進んで行きました。気温が低いということは、雪崩の恐れが少ないということでもあります。また、雪面も予想していたほど悪くなく、アイゼンが充分効いて、ザイルを使わずに進むことができました。でも8合目下あたりでは、さすがに疲れが出てくる頃で、また8合目が遠いということもあって、道を知らないお二人は随分長く感じたことだろうと思いました。


地吹雪のなかの富士山頂上。左からK博士、Aさん、Mさん

8合目を過ぎ、ガスの切れ間に9合目の赤い鳥居が見えた時は、これで頂上へ着けると確信でき、足も急に軽くなったものです。

頂上へは12時半頃に着きました。富士山の頂上は伏せた茶わんの底の縁のようなもので、晴れていればお釜が内側に望めるのですが、われわれを迎えた頂上は一段と強い地吹雪の世界で、視界は数メートル先も見えない状況でした。これ以上登るところがないのが分かるのと、頂上を示す木製の標柱が立っているだけの頂上でした。握手の後「富士山頂上浅間大社」と書かれた標柱の意味を英語で説明し、記念撮影と、そそくさとビスケット、水の後には、もう下る準備に追いたてられるほどに風は強く、まったくの冬山の世界でした。

実は、頂上で湯を沸かしカップラーメンを作ろうと思い、用意はして行ったのですが、とてもそんな状況ではありませんでした。

疲労と闘って無事下山

雪面の状態は悪くはないとはいえ、この時期富士山頂上部で転倒し、滑落し始めますともう止まりません。転倒は、下りに際してアイゼンの爪を岩角に引っかけたり、不安定な状態で強風にあお

られたりした時に、疲れた体で支えることができずに起こりがちです。

そのため、下りは２人１組でザイルを結び、１人が転んでも１人が止められるようにします。私とＫさん、私の友人ＡさんとＭさんが組んだのですが、おかしかったのは、私が用意したゲスト用のハーネス（ザイルと結んで腰に巻くベルト状のもの）は、Ｋさんのお腹が立派すぎて使えなかったことでした。するとＫさんも心得たもので、ニコッと笑ってザイルを肩から胸にタスキ状に器用に架け、簡易ハーネスにしてしまったので、なるほど世界の山々を登る人はたいしたもんだと私は感心したものでした。

下山は、登って来たルートを引き返すわけですが、地吹雪で視界が悪く、踏跡は殆ど埋もれていて、慎重になります。とくに左側にまわりすぎると吉田大沢の上部に入り危険です。何度か方向を修正し、一瞬のガスの切れ間に下山方向を確認して、８合目くらいまで下りました。さすがにＫさんは足どりもしっかりしていて何ら問題はないのですが、長身のＭさんは疲れが膝にきているようで、頂上から８合目のこの間に、数回転んでいました。そのたびにパートナーのＡさんがザイルをたぐり制動姿勢に入っていましたが、いずれも傾斜の緩いところで大事には至りませんでした。

ゲストの場合、異国で連日の会議・打ち合わせの後、休む間もなく、標高3,000m近辺で、高低差1,400mを、この悪天の下で登り下りするのですから、疲れも出ると思います。まさに、モーレツな日程であろうと思われました。

８合目を過ぎ7.5合目くらいになって、次第にガスが晴れ始め、風も弱くなってきました。われわれが雲の下に降りてきたという感じでした。北東の方向はるか眼下には、三日月型に青色の湖面が輝く山中湖が望めます。湖手前には黄土色の太い帯が、北から北東にかけて続きます。北富士演習場です。ここに来て、ようやく心おきなく休める雰囲気でした。

富士吉田登山道には、10以上の山小屋がありますが、この時期は殆どの小屋が、風防けの石を載せた屋根だけが見えるほどに雪に埋もれています。われわれもその屋根の上を拝借して、やっと腰を落ち着けて休むことができました。その時の写真を見ると、体はお互いにザイルで結ばれていますが、水筒を片手に持つ顔など、どれも緊張から解かれたからか、ホッとした自然な笑みが口許に感じられます。

下山中、７～８合目間にある山小屋の屋根上で休憩

休憩の後の下りは、少ししてザイルを解き、吉田大沢へ入って、各々広い斜面を勝手に降りて行きました。思わず鼻歌も出ようというものです。ここまでくれば、天候が良ければ、どう降りようが道に迷うことはありません。６合目を過ぎてアイゼンを外し、山腹を巻くようにして５合目レストハウスに着きました。出発前に予定した時刻15時半ドンピシャリで、Ｋさんも驚いていました。

終点５合目では、上司お二方と、運転手さんに迎えていただき、たいへん晴れがましい思いをさせていただいたものでした。

信頼関係で任務を全う

冬山や岩登りなどは、プロガイドは知りませんが、私などにとっては、気心の知れた相手でないと多かれ少なかれ不安がつきまとうものです。この時期の富士登山は、4,000mを越えるヨーロッ

パ・アルプスならさしずめ夏山でしょう。それでも、異国の地で素性のよく分からぬアマチュア２人にガイドされて、地吹雪の富士山を登るのは、どんな気持ちだったでしょうか。同じ１時間を歩くのでも、以前に歩いたことのある道と、初めての道とでは受け取り方が大分違います。

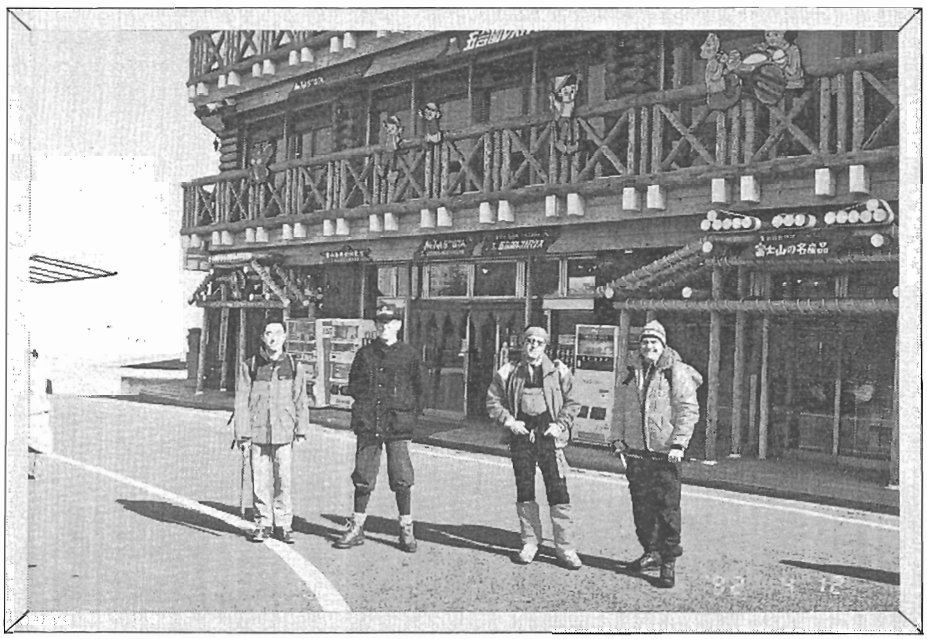
登り8.5合目あたりでは、私はこのまま登り続けるかどうか多少迷いもありました。そんな状況を知ってか知らずか、ゲストのお二人は、不安げな様子を少しも見せず、実際はKさんがMさんを相当気遣っていたのですが、われわれガイド２人を信頼していただき、ただ黙々とついてきていただいたのには、頭の下がる思いでした。

５合目レストハウスで、おでんにビールで乾杯の後、感謝の言葉を受けた時、「無事終わってよかった。」の思いでいっぱいでした。その時には、再びこんな機会のある時は、雪と岩だらけのいかにもヨーロッパ・アルプス的な山ではなく、新緑や紅葉といった日本的な山をご案内したいものだという思いを申し上げました。

少ししてAさんと私は、タクシーで河口湖駅めざして下って行きました。いつの間にか５合目も吹雪になっていました。河口湖駅前の鰻屋で特上の鰻重と酒で、友人Aさんと祝杯とし、改めてAさんにお礼を申しあげた次第でした。

出張命令で登山するというのも思いがけない経験でしたが、友人Aさんに助けていただき、職場でもさまざまにお気遣いをいただいて、何とか無事に任務を全うすることができ、感謝しています。

（日本たばこアイメックス㈱）



無事下山して記念撮影。富士吉田５合目レストハウス前 左端筆者

越後新発田藩塩留事件顛末記

――塩にみる外様小藩の苦悩――

奥田　雅瑞

新潟県の最北端にある村上市が、皇太子妃雅子さまのご先祖の土地ということでにわかにクローズアップされてきた。その村上市から少し南に新発田市がある。数年前、この二つの町をタバコ史の調査で訪ねたことがあった。どちらも古い城下町で一度は行って見たいと思っていた所だが、駆け歩きのため、その良さをじっくり味わう暇はなかった。

それでも、新聞に村上市のことが出る度に懐かしく思い出す。一方の新発田市は「しばた」という特異な読みと、ご存知忠臣蔵・堀部安兵衛の出身地ということで、知っている人もいるかもしれないが、知名度はそう高くないようだ。

この新発田市で、昔、塩にまつわる一つの事件があったことを偶然知った。単なる取引上の紛争でなく、当時の新発田藩にとって生きるか死ぬかの大事件だったのである。塩に関係ありということで妙に惹かれ調べてみた。専門家はとっくにご存知だと思うが、素人の厚かましさで書かせていただく。

まず新発田藩の成り立ちから始めよう。

新発田藩の初代藩主は溝口秀勝である。天文17年(1548)、尾張国中島郡溝口村の地侍の子に生まれた。戦国時代の勇将丹羽長秀に仕えて武功をたて、天正9年若狭国高浜5,000石の城主になった。のち豊臣秀吉の直臣となり、同11年賤ケ岳合戦の功により加賀国大聖寺44,000石を与えられた。慶長3年、越後の上杉景勝が会津に移封されたあと、越前北庄（福井）の城主堀秀治が越後に入り、その与力大名として溝口秀勝に新発田6万石を、村上頼勝に村上9万石が与えられた。こうして新発田藩と村上藩とが隣りあって成立した。

慶長5年、徳川と石田のいわゆる天下分目の合戦にあたり、両藩は徳川方につき領土を安堵された。しかし徳川の天下になると、外様の小大名として安閑としておれなかった。慶長15年には豊臣恩顧の大大名であり、村上藩や新発田藩の寄親大名であった堀家があっけなく潰されてしまった。ついで隣藩村上家が、元和4年（一説に同3年）家政不行き届きの廉で改易された。こうしたなかで溝口家はなんとか生き残ることができたが、気がついてみると周囲はすべて親藩・譜代か幕領に取り囲まれ、越後でたった一つぽつんと孤立した外様大名になっていた。

こうした状況のなかで塩にまつわる事件が起こったのである。時に第3代宣直（のぶなお）の時代（藩主在位、寛永5年1628～寛文12年1672）であった。事件の内容を、新発田藩の正史といえる『御記録[1]』（一名『廟記』）の巻之三はこう書いている。

万治3庚子年10月10日
会津役人立ち越し、山内口留番所辺にて井上久助を斬罪に行う
会津より蠟燭をさし越し、御領分よりは塩をさし遣はし候事、年々常例に候ところ、会津より蠟燭を差し留め候につき、御領分よりも塩を指し留め、遣はさず候ところ、会津にて殊の外遺恨に存じ、罪人指し出さず候はば、御家の御難儀に及ぶべき事体につき、其の事に関り候役義にもこれ無く候え共、御上への忠悃を存じ、みずから罪を引き受け、会津へ参り、塩留一件は私の所為にて、領主には少しも存じ申さざる旨申し述ぶるにより。

この外、同じような資料が三つある[2]。事件の内容はだいたい同じだが、処刑の年がちがうのと、記事にいくらかの特長があるので、特異な点だけ摘記する。

『蕉鹿年代記[3]』明暦3年10月10日、山内口留番所辺で斬罪。

『世臣譜　巻一[4]』万治元年10月10日、山内口留の辺で斬罪。井上久助は400石取りの武頭[5]。寛永3年家光上洛に新発田家がお供したとき御長柄奉行。同13年朝鮮人来聘のとき豆州三島で御馳走役を勤む。事件当時、50余歳（注・久助は新発田藩において上級家臣であったことがわかる）。

『寒廟御代行事[6]』万治3年10月、久助一人の不調法に決まり、会津・新発田両藩役人立合いのもとで、山内口留の辺で斬罪。

以上の資料によって、井上久助という人が斬首された時は、明暦3年(1657)、万治元年(1658)、万治3年（1660）といくらかちがうが、いずれにしても第3代新発田藩主溝口宣直の時代である。ここでは藩の正史『御記録』にしたがい万治3年（1660）としておこう。ところで事件の内容を整理してみると、次のような骨子になる。

①新発田藩の塩と会津藩の蠟燭との交換取引が「常例」であった。
②会津藩が蠟燭の送付を止めたので、新発田藩も塩の送付を止めた。
③ところが、意外にも会津藩はたいへん怒り、「塩留め」をした「罪人」を出すこと、出さなければ「御家（新発田藩）の大事」になる恐れがあるといってきた。
④そこで、本件とは職務上関係のなかった井上久助が「罪」を一身に引き受け、会津におもむき、責任はすべて自分にあると陳弁し、両藩の国堺・山内口留番所付近で斬首され一件落着した。

以上だが、これは塩留めから起きたたいへんな事件である。塩留めをした犯人を出さないと「御家（新発田藩）の大事」になるという。「御家の大事」とは、場合によっては大名の減封か改易を意味する。まさに大事件である。

塩にまつわる事件としてすぐ頭に浮ぶのは、戦国時代越後の上杉謙信が敵の武田信玄に塩を送ったという話と忠臣蔵の赤穂の塩であろう。前者は美談として伝えられ、後者は浅野内匠頭の吉良刃傷の原因という説がある。いずれも話としては面白いが、まだ事実として確認されていない。これに反し、この新発田藩と会津藩の事件の端緒は塩そのものであり、それが元で「御家の大事」になるというのである。塩にまつわる隠れた前代未聞の大事件といえよう。

しかし、発端はどうやら会津藩が蠟燭を送ってこなかったことにあるようだ。にもかかわらず会津藩はなぜこのような高びしゃな態度でやってきたのであろうか。周辺資料と併せて当時の情勢を再現しながら検討してみよう。

現在の新発田市は全く海に面していないが、新発田藩時代は信濃川右岸から現在の紫雲寺町まで長い海岸線を領有していた。「海岸集落は古くから

製塩を行い、慶長18年（1613）嶋見では塩年貢の代米８石１升を納めている。元禄（1688～1704）のころは、太郎代浜、亀塚浜、嶋見浜の三浜に、塩釜が58軒もあり、年貢塩も17石にのぼった[7]」（『新発田市史　上巻　909頁』）というし、また「巳丑（宝永）６年（1709）　太郎代、亀塚、嶋見浜にて、古来より塩焼58軒の処、内21軒此年より減ず」（『蕉鹿年代記』）とあるから、以前は塩もかなり豊富に取れ、他国に移出する余裕もあったであろう。

逆に新発田藩では蠟ができなかった[8]。一方会津藩は漆・蠟の産地として有名である。外貨獲得の手段として藩も保護奨励した[9]。反対に山国だから塩がほとんどできなかった。そこで塩と蠟燭の交換取引が成立し、これが「常例」となるのは当然の成り行きであったろう。ただ、その交換取引とは藩際貿易なのか商人取引であったのかは不明[10]だが、いずれにしても有無相通ずる経済行為であったと思われる。

ところがある年、会津から蠟燭の出荷が止った。そこで新発田側も塩の出荷を止めた。藩際貿易であろうと商人取引であろうと、経済行為としては当然であろう。だが、そうであったにしても、普通なら会津からの出荷が止った理由をただしたのち塩の出荷を止めるだろう。なぜそれをしなかったのか。

考えられることはこうである。『御記録』に、「戊子慶安元年(1648)、是年御在所にて、蠟燭よろしく出来候に付、初て御用に仰せ付けらる」とあり、『蕉鹿年代記』ではもう少し詳しく、「慶安元年此年、御領分木の実450俵、漆61貫500目出る。初て蠟絞り仰せ付けられ、木の実１石より蠟１貫目出る。色青し。総蠟高100貫余これあり候事、初て蠟燭御在所にて出来御用に相成候」とある。

つまり、事件の少し前から新発田でも蠟が生産されだしたのである。当時、蠟燭は贅沢品である。藩主か高級藩士あるいは裕福な商人が使うか、贈り物にするくらいなものである。藩内でできるようになれば、なにも高い金を出して藩外から買うことはない。一方、塩の生産には燃料として膨大な薪木がいるが、これが次第に少なくなり塩の生産も減ってきた。前述のように、後の宝永６年ころ塩釜が激減したのは薪木不足のためである。

そして享保（1716～35）になると逆に移入藩になっている。事件のころは薪木不足がしだいに顕在化してきたであろう。したがって、蠟燭の移入がそれほど必要なくなれば、塩もできれば出したくなくなるだろう。そこへ相手側から蠟燭の出荷が止ったのだから、得たり賢しとばかり相手の事情も確かめず塩の出荷を止めたのではなかろうか。

ところが思いもかけず、塩の出荷停止について会津側から強硬な文句がやってきた。山国で塩がほとんどできない会津としては、塩の出荷停止は極端にいえば生死にかかわる問題である。だから強硬な文句をいってくるのは当然といえるかもしれない。

しかし、事は経済問題である。世は平和の時代である。新発田から塩が来なくても、値段の問題は別としてどこからでも容易に買えたであろう。塩の出荷停止の「罪人」を出せとか、出さなければ「御家の大事」に発展するほどの問題ではない。「御家の大事」とは、他藩の者が軽々しく口にすべきでない高度な政治問題である。

蠟燭という経済問題が、なぜ簡単に「御家の大事」という政治問題に転化するのか。不思議なことに、先に紹介したように新発田藩は反抗の姿勢を示した兆候は少しもない。なぜ、そちらが蠟燭を送らなかったから、こちらも塩を送らなかったのだといえなかったのか。

藩はただ、井上久助の忠義心にすがり、易々として久助を会津に送り、斬首されるままになっている。しかも斬首の場所は山内口留番所付近という。それは新発田から会津に通ずる会津街道（会津側からいえば越後街道）にある新発田藩側の番所で、すぐ先が会津領である。

斬首の場所は新発田側か会津側かわからないが、どちらにしても新発田藩から見える所で斬首されるのを黙って見ていたのか。一藩としてこの上ない恥辱であろう。さらにいえば、会津街道は新発田藩の参勤街道である。新発田から山内口留番所

を通って、会津若松に出、それから白河で奥州街道に出合い江戸に行く。

帰りはその逆で、参勤の行き帰りには、いやでも久助が斬首された近くを通らなくてはならないのである。普通なら通る度に会津に対する憤激の念を新たにするのではなかろうか。しかし、そうした記録は見当らない。思えば不思議な新発田藩の態度である。

ここで井上久助について少し紹介しておく。父は八左衛門。先祖は今川義元に仕えたが、その没落後高浜で溝口秀勝に仕え700石を頂戴した（『世臣譜』。注・高浜時代の秀勝はわずか5,000石。700石は大成寺あるいは新発田での禄高であろう）。慶長6年病死。死んだとき、秀勝がその死を悼み、遺族に配慮した心温まる手紙が残っている。

その子久助は400石だから、兄弟で分けたものと思われる。400石でも前述のように新発田藩では高級武士である。井上家は「代々勇力人に越えた」[11]という。それと秀勝の温情に感じ、決死の忠義となったものであろう。

ところで、一方の会津藩はなぜそれほどまでに嫌味なことをしなければならなかったのであろうか。そのいい分はなにか。筆者は会津側を調べる余裕はなかったが、新発田市の調査によれば、会津に本件に関する資料はないという。それでは会津藩のいい分はわからない。

が、幸いなことに会津藩側の論理をうかがわせる資料が『新発田市史　下巻』に収録されている。『小伝』と題する小冊子で、事件後誰かが書き留めていたものがあり、その後また誰かがそれによってまとめたものだという。内容が脚本的・浪速節的で資料としては問題があるが、以下簡潔に紹介してみる。

万治元年（1658）5月、会津藩から御用状がきた。常例の塩を送らないのは不都合である。近日、使者を遣わすからその理由を回答せよ、という。同月21日、使者がきた。口上はこうである。

米塩は兵家の欠ぐべからざる糧食である。会津藩主松平正之は親藩かつ東北の押えとしての大命を蒙っている。にもかかわらず塩を送らないのは会津藩に対する敵対行為とみなす。この責任は藩主にある。ひいては幕府の思召も軽くあるまい、と。驚いた新発田側は即答できず、後日の回答を約して一応引き取ってもらったが、その後、幕府から使者を送るとの連絡がきた。

こうなると荏苒（じんぜん）手をこまぬいているわけにはいかない。家臣一同を集めて協議したが名案なく、いたずらに時が経過するばかりであった。ついに井上久助が膝を進め、自分が責任を負って会津藩に申し開きをすると申し出た（この辺の描写はドラマチック）。一藩の期待を背にして久助は単身会津に行った。

会津に着くと町宿預けになり、家老じきじきに聞き取り役となり尋問が行われた。会津側の意図は、塩を会津に送らなかったのは藩主の意思であることをいわせようとするにあったようだ。それに対し久助は、自分が郡奉行の職を利用して塩荷を他方に売り払い着服したため送れなかったもので、藩主はなんら関知しないと主張した（この辺の質疑応答はリアル）。会津側の期待する白状をしないので、とうとう炮烙の拷問にかけられることになった。

これは銅板を下から烈火で焼き、その上を渡らせるものだ。久助は死を覚悟して、会津藩主から与えられた装束を着し、謡曲の36番「かきつばた」を謡いながら渡り、謡い終わってばったり倒れた。

『小伝』はここで終わっている。これで死んだのかどうかわからないが、おそらく死んだのであろう。たいへん悲壮で華やかな歌舞伎的忠死だが、他の資料はすべて山内口留番所付近で斬首されたといっているから、これはかなり脚色されているように思われる。

そうなると『小伝』全体の信頼性が薄れることになる。また、全編状況描写や会話のやりとりがあまりにもリアルでドラマチックに描かれているので、どこまで事実としてよいかわからないが、しかし、それでも節々に会津藩の基本的態度が読み取れる。それは前掲文にはっきり出ているが、念のため骨子を箇条書きにしてみよう。

①米塩は兵家の欠ぐべからざる糧食である。

②会津藩主松平正之は親藩かつ東北の押えとしての大命を蒙っている。
③その会津藩に塩を送らないのは会津藩に対する敵対行為とみなす。
④塩の送付を止めたのは藩主の意思であろう[12]。
⑤とすれば、幕府の新発田藩に対する思召も軽くないであろう。

これは骨子で当時の文言そのものではないが、いかに丁寧な外交辞令を使おうとも、きわめてきつい内容である。しかも、会津が蠟燭を送らなかったことについては一言もふれず、一方的に新発田藩の非を鳴らし、さらに、米塩は不可欠の軍需物資の理由のもとに敵対行為と決めつけ、「幕府の思召」まで持ち出すのは言い掛かりと恫喝としか考えられない。

なぜこのような行為に出たのであろうか、また出る力があったのだろうか。逆にいえば、久助は郡奉行でもないのに、なぜ郡奉行といつわり、金を横領したと無実の罪を自らいいたてなければならなかったのであろうか。「代々勇力人に越えた」久助なら、なぜ会津側の非を敢然と主張しなかったのか。

時の会津藩主は会津23万石の藩祖と仰がれる保科正之である。この辺に事件解明の鍵がひそんでいるようだ。保科正之については今更紹介するまでもないと思うが、改めて見てみよう。

保科正之は徳川2代将軍秀忠の第三子として慶長16年5月に生まれた。母は神尾氏お静の方。つまり、妾腹である。秀忠の正妻は浅井氏お江(ごう)の方で、淀君の妹。姉に劣らず勝気な性格で、秀忠の浮気を絶対許さなかったという。その目を盗み、ただ一度犯した浮気で生まれたのが正之で、家光の異母弟にあたる。しかし、お江の嫉妬を恐れ、城外で養われ、のち元和3年秀忠の密命で信濃高遠城主保科正光の養子となった。

寛永6年参府し、初めて秀忠と親子対面して血筋が公認された。寛永8年高遠3万石の家督を継ぎ、同13年山形20万石に移り、同20年には会津城40万石の城主加藤明成が家臣との争いから所領を返上した跡を受けて、その内23万石が正之に与えられた。しかも、実質は30万石に相当するという。

余談だが、将軍家光が鷹狩りに行ったとき、偶然正之が弟であること、しかもわずか3万石に甘んじていることを知り、処遇を改めたという「美談」が講談や浪曲で語られている。事実かどうかは保証の限りでないが、待遇改善の史実とは符号している。しかも、会津は秀吉以来「奥羽仕置きの支配人」が配置された北の重要な軍事拠点である。正之に対する家光の信頼が大きかったといえよう。

家光は慶安4年(1651)、わずか11歳の家綱を残して死んだ。家光の代に幕府の基礎はだいたい確立していたが、幼い家綱ではその存続が危まれたのであろう、死の寸前正之を枕頭に呼んで後事をくれぐれも頼んだという。家光の付託に感激した正之は、以後、会津に帰ることなく国許の政は家老に任せ、江戸に常駐して国政に専念した。公正を旨として諸侯の私謁を退け、たとい老中の許可したものでも許さないことがあったという。

周知のように、家綱の幕政は文治政治といわれ、前代までの武断政治から大きく方向が転換したといわれている。主な事績をあげると、家光が死ぬとすぐ末子養子の制を定めて浪人の増加を防ぎ、ついで「寛文の二大美事」といわれる殉死の禁と大名証人制の廃止を決めた。特に後者は、戦国の遺風に最後のとどめを刺したといわれている。

このほか、幕府機構を整備したり、旗本諸役役料制(8代将軍吉宗の足高制の先駆をなす人材登用の制度)を設けたりして、番方(軍務職)に対する役方(事務職)の優位を確立した。また、玉川上水を開設したり、明暦3年の大火の災害の大きさにかんがみ両国橋をかける等、民政の実もあげた。もちろんこれらの事業は家綱がしたのではなく、幕閣が行ったものである。

当時の幕閣には、大老として宿老の酒井忠勝(65歳)あり、老中として阿部忠秋(50歳)、松平信綱(56歳)、松平乗寿(52歳)といった江戸時代を通じて最も有能と評される執政がいた。この中に正之が将軍補佐として入ったのだが、新参であり、歳も41歳といちばん若い。したがってどれだけ発言

権があったかよくわからないが、恐らくこれらの人々と集団指導体制を組んで処理したのであろう。

いずれにしても時の幕閣で大きな存在であり、権力の頂点に立っていたことは確かである。そして、家光亡き後、由井正雪の慶安の変に象徴される混乱期を見事に切り抜け、しかも武断でなく文治を実現したのである。

正之の性格をみてみよう。「性質温厚にして清廉、かつ義のためには厳正なところがあり、会津藩主として、家臣団の統制や民政の安定・教化にすぐれた手腕を発揮した[13]」といわれている。また、学問を好み、はじめは禅理を求めたが、40歳以後は儒学に専念、寛文元年には山崎闇斎を招いて神儒両道の研究に入った。専門家以上に奥義を極め、その理念を政治に生かした。そこで「敢えていえば哲人政治家である[14]」。寛文12年「卒するに及んで……名残惜しまぬはなかりしとぞ」(徳川実記) ということである。

以上が公私にわたる正之の評伝的人物像である。そして、多くの評者は江戸時代の「明君」中の明君と讃えている。

本論に戻るが、ここで筆者の頭は混乱する。正之の以上の人物像とこの事件の人物像の焦点がどうしても合わないのである。この塩事件は「温厚・清廉」の「哲人政治家」、そして文治政治を推進した正之の会津藩が仕掛け人である。このため、罪のない一人の武士が、武士として屈辱きわまる斬罪に処せられたのである。これをどう考えたらよいのであろうか。

まさにジキルとハイド氏の世界ではないか。好意的に考えれば、事件が起きたのは正之が江戸で幕政に没頭していた時のことだから、会津の国家老が正之の権威を笠にきて勝手にやったことで、正之は関係なかったのではないか、といえるかもしれない。しかし、正之は国元には帰らなかったが、藩の政治は一々正之の綿密な指示によって厳格に実施させ、家老は正之の忠実な計画の実行者にすぎなかった[15]というから、国家老の独断行動ではなく、本件は正之も関与していたであろうし、少なくとも事件の推移は知っていたであろうと思われる。

そうすると、正之の地位や権力と塩事件を短絡的に結べば、会津藩は正之の権力を笠にきて無理難題を吹きかけたということになろうか。確かに自分の非は一言もいわず、相手の非のみあげつらい、はては「お家の大事」を持ち出し、無関係と知りながら一人の上級武士の首を刎ねたのは、ただ天下に会津藩の威力を見せつけようとしただけだといわれても仕方があるまい。

これは文治でなく、まさに武断そのものであろう。武断といえば、正之にはこんな「前科」がある。山形藩主時代の寛永15年、隣の幕領白岩郷で農民一揆があったとき、首謀者35人を謀計を以て三々五々山形に誘い込み、全員一挙に捕らえ磔刑に処し、一揆を粉砕してしまった。島原の乱の直後だけに百姓一揆に敏感だったという事情はわからないではないが、そのやり方には決して好感がもてない。これと塩事件を合せ考えるとき、正之の評伝的人物像はぐらつかざるをえなくなる。

ところで、会津側になぜ本件の記録が残っていないのであろうか。あるいはこれをもって本件は架空の事件とみなす見方もできるかもしれない。しかし、筆者はたしかイソップ物語だったと思うが、こんな寓話があったことを思い出す。子供が蛙に石をなげつけて遊んでいた。突然、蛙が声を出して、こういった。「止めてください。あなた方にとっては遊びかもしれませんが、わたしたちにとっては生きるか死ぬかの瀬戸際なのです」。

会津藩にとっては、挨拶なく塩を留めた小癪な外様小藩を少しいたぶってやれといった程度のことで、格別記録に留める程のことでなかったのかもしれない。

なお、本件は子細にみれば単に会津藩の横暴というだけでなく、その背景にはもっと複雑な事情も含んでいたように思われる。紙数の関係で簡単に列挙する。

①塩と蠟の交換が「常例」になるに当たっては、成文・非成文にしろなんらかの契約があったと思うが、その内容がわからない。例えば、『新発田市史・民俗（下)』によれば、「ハゼ

からの蠟も軍需品とみて採集を各藩とも奨励していた」とある。すると、両藩の間に塩と蠟を軍需品として交換の契約があったのかもしれない。そうなると、本稿の方向もいくらかちがってくるかもしれない。

②新発田藩は最初の表高は6万石だったが、河川の氾濫常なく、湿地も多く実質は2万石程度にすぎなかった。それを士民の努力で開発し、最終的には20万石とも40万石ともいわれる美田[16]とした。宣直の時代はかなり裕福であったといわれる。幕府はそれを狙ったのではないか。現に、幕府は後の寛政元年(1789)、一時的であったが新発田藩の富裕な2万石を取り上げ、代りに陸奥国信夫郡の貧地を与えた。これにより新発田藩の財政は急速に悪化した[17]、という事実がある。

③藩主宣直は剛直な人物だったようだ。当時の有名な旗本奴・水野十郎左衛門[18]も宣直に会うと、「鞠躬して道を避けて通[19]」ったというから、かぶき大名的素質が強かったかもしれない。それを幕閣から睨まれたのではないか。

④この塩事件の真の目的は、新発田藩を別件で脅して会津藩の蠟燭販路の確保にあったのではないか。

というようなことである。これらを組み合わせれば一遍のドラマになりそうだが、その任ではないし、その余裕もない。ただ、こういうことだけは確実にいえそうである。いわゆる文治政治といっても、外様大名もいくらか安眠できるようになったが、やはり甘いものではなく、少しでも油断すると頭を叩かれる。徳川封建体制のこわさをまざまざと見せつけられた思いである。

最後に蛇足をつけ加えて終わりにさせていただく。塩事件から約200年後、さしもの徳川幕府の権威も薄れ、国内は勤王と佐幕にわかれ沸き立った。このとき新発田藩はどうしたか。久助の無念の死を思い起こし、仇を報ずるため敢然と立ち上がったか。そうではなかった。

勤王佐幕の間に立ってうろうろし、むしろ会津の機嫌をとり、藩内の勤王分子の動きを会津に密告したりしている。最終的には勤王方につき会津討伐の先鋒を務めたが、久助の仇討ちの声はついにきかれなかった。久助の忠死はすっかり忘れられたのであろうか。徳川幕府が武士を完全に去勢したマインドコントロールのすごさを改めて思い知らされたし、また時には、なんともやりきれない歴史の無力感を感じさせられた。

単なる塩の取引から発した事件であったが、いろいろ考えさせられ、勉強させられた事件であった。

〔注〕

(1)『御記録』新発田藩歴代藩主の治績を編年体に記録したもの。藩祖以来の日録や旧記に基ずき、安永元年（1772）に始り、天明6年（1786）成る。藩の正史といえる。

(2)下記の三つの資料の外に、中村休五郎という人が文政7年、自家の由緒書を藩に提出した『先祖大聖寺より御供仕り御当藩に罷りあり候事跡』というのがある。もともと筆者が本事件を知ったのはこの資料からであるが、ただ、内容が他の資料とかなり異なっている。これにふれると混乱する恐れがあるので、ここでは取り上げないことにする。しかし、これにはタバコ史の興味ある初期資料も含んでいるので、別途取り上げることにしたい。

(3)『蕉鹿年代記』蕉鹿こと新発田の商人・安田藤十郎が先祖の残した記録を基に編年体でまとめたもの。天保14年3月12日の序文あり。

(4)『世臣譜』新発田藩家老・溝口長祐編著。天明6年（1786）頃編集にかかり寛政4年（1792）脱稿。

(5)「武頭」御仕置役（家老）その他上級家臣が任ぜられ、足軽組を指揮した。

(6)『寒廟御代行事』第3代宣直の法号は寒光院殿。すなわち本書は宣直一代記の意。筆者未見、『新発田市史　下巻』837頁による。

(7)この製塩法について、『新発田市史　下巻』(837頁)は、「そのころには揚浜法が衰微して入浜法が大勢だったろうが……」としているが、どうであろうか。

(8)新発田藩の公式文書の写しである『案紙帳』の寛永10年正月3日の条に、「旧冬新発田より(江戸に)登せ候蠟燭は……黒く候故已来入念の由仰せ出さ

れ候」とある。少しはできたのであろうが、品質は悪かったようだ。

(9)保護奨励というより蠟漆樹の植栽を強制し、「漆の枝を１本伐ると指１本切る」という規定があったという。

(10)『新発田市史料　第二巻』には、会津での蠟燭の買い付けに新発田藩士がかかわったような記録がある。しかし、他の資料では商人がかかわっていたという資料もある。

(11)『世臣譜　巻一』、『新発田市史　上巻』270頁。

(12)藩が藩内の事情で特定の品を藩外に出すことを禁ずることがある。これを「津留め」といい、その品を「留物」という。例えば、ある品を専売にしたとか、干害等で米が不足したとき、あるいは藩内で品薄の品等をよく津留めにする。これは藩主の責任において行うもので、これがなんらかの事件となれば当然藩主の責任である。会津藩は、新発田藩が塩の津留めをしたと解し、藩主の責任を問うたということが考えられる。しかし、飢饉のとき米の津留めはどこの藩も行っており、会津藩の論理を適用すれば、いつも「お家の大事」が起こることになる。

(13)藤野　保著　『徳川幕閣－武功派と官僚派の抗争』中央公論社。昭和41年3版。184頁。

(14)北島正元著『江戸幕府－その実力者たち』人物往来社。昭和39年。192頁以下。

(15)前掲『江戸幕府－その実力者たち』173頁。

(16)『新発田市史資料・第五巻・民俗（上）』３～４頁。昭和47年刊。

(17)『新発田市史　上巻』467頁。昭和55年刊

(18)「水野十郎左衛門」生年不明。祖父は備後福山10万石領主水野日向守勝成（この人も、かぶき大名として有名）。慶安３年(1650)、父の遺領3,000石を継ぎ家綱に仕えたが、病と称して出仕を怠り、無頼の徒を集め市中で不法の所為が多かったため、寛文４年（1664）切腹を命じられた。町奴幡随院長兵衛との抗争およびその殺害が世に名高い。

(19)『新発田藩史料・１巻』19頁。新発田市史編纂委員会編。昭和40年刊。

（前たばこと塩の博物館館長）

塩漫筆

塩 車

『塩は肥料か？』

農作物と塩

俗に「青菜と塩」という。また台風や高潮による災害として海岸の農作物の塩害がある。農作物といわず、陸上の植物にとって、塩は邪魔者であり有害である。これが一般の常識であろう。ところが、瀬戸内では昔から「藻刈り」が行われ、俳句の季語にもなっていた。刈った海藻（主としてアマモであった）を山のように舟に積んで持ち帰り、浜辺に干したものは畠の近くに稲塚のように積んでおき、田畑にすきこんで肥料にする。

この干した海藻は、その昔藻塩焼きの頃、これからかん水を採った位だから相当な塩分が含まれている。そういえば、古い塩カマスも畑の肥料として重用されたように記憶している。それどころか、昔は塩自体が肥料として使われていたのである。

昭和10年代に書かれた福永範一氏の『製塩及苦汁工業』[1]によると、当時の塩の用途としては家庭用、食品用、薬用、農業用、家畜用、工業用があげられている。この中、家畜用は飼料であり農業用は選種および肥料用とされている。肥料は塩の主要な用途の一つだったのである。その塩の効用として「土壌中の不溶性有効成分を溶解性とし、又土壌の理学的性質を改善し容水性を増す。蕎麦及び藺草、大麻の如き繊維作物に対して肥料的効果がある」と記述している。塩は土壌改良と肥効の両面に効用があるというのである。

イギリスの農業用塩

18世紀の末、イギリスでは塩が肥料として使われていた。当時の塩価は1t当たり3ポンド10シリング。驚くなかれ、その中3ポンドが税金であったという。1798年、これをさらに16ポンド上積みして19ポンド10シリングにしたという。国にとっては塩というより金であり、税金そのものであった。

それどころではない、折からのナポレオン戦争で蒙った経済危機を切り抜けるため、1815年には塩1t当たり30ポンドの塩税を課したという。1814年、W.S. Loshはイギリスで最初のルブラン法ソーダ製造を始めたが、この塩税値上げによって生産不能に追いこまれた。国会で大議論の末、1818年に農業用塩の減税が次のようにきまった[2]。

① 地味の改良、家畜飼料用は塩税 2.5シリング／ポアソー

② 油烟、灰、厩肥と混ぜる塩は 0

当時のイギリスでは農業用として、このような使われ方だったことがわかる。「ポアソー」は容積の単位で7升3合に当たる。重量換算すると塩税は1t当たり約10ポンドと推測されるので、①の塩税は一般の3分の1に減税されたようである[3]。

1819年の農業用塩は全体で1,000t、その内肥料用として約360tが使われたが、1821年には僅かに42tとなり、塩税が廃止された1824年には33tと農業用塩は少なくなり、1825年以降肥料用として使用されることはなくなった。塩税撤廃後の塩価として次の記録がある。（1t当たり）

スコットランド	1ポンド2シリング
ランカシャー	6シリング
チェシャイヤー（塩産地）	6ペンス

この塩税廃止をうけて、マスプラットがソーダ製造に乗り出し、その後のイギリスのソーダ工業隆盛の出発点となった。

フランスの塩肥料論争[3]

イギリスのこのような動きに少しおくれて、フランスでは1840年から塩税をめぐっての論議が盛んになり、結局1848年に塩税は撤廃されたのであるが、その論議の課程で農業用塩が問題となった。塩が肥料として本当に効果があるのか、どうか、フランスの学界を二分しての論争となったのである。肥効ありとする者は、

① オランダの、海に接する低地は豊饒である。

② 海水を混和した厩肥は、淡水を用いたものより効果が大。

③ ノルマンジーでは、青魚の塩滓が地味を改良するとして使われている。

④ ゲルマン、ポーランドの岩塩坑の残滓も同様な効果があり、実際に多く使用されている。

これに対して肥効説に反対する人々は、その理由を、

① 一般的に塩分の多い土地は荒地で農耕に不適。
② 昔、塩を畑にまいて荒地とする刑罰さえあった。
③ 肥料として効果があるのは、特定の作物あるいは特殊な土地に対してであり、一般的ではない。

この問題に対して、ペリゴ氏は実際に試験を行い、1872年次のような結果を発表した。

① 塩は、一般的には肥料効果はない。
② 沃地に少量の塩を施すと、一時的に著しい土質改良効果がある。しかし、その効果は持続性がない。
③ 瘦地に対しては効果はない。

また、翌年学士院で行った講演の内容は「植物は、カリウムは吸収するがナトリウムは全く吸収されない」というものであった。

20世紀の評価

20世紀半ば、わが国では冒頭に掲げた通り、塩が肥料としても使われていた。同じ頃、アメリカでも農業に塩が使われており、調査研究も盛んに進められていた。鉱山局年報[4]によると、1940～45年頃家畜飼料用塩は年間730～910千tが使われ、その他に農業用塩として52～99千tが消費されている。アメリカでは、穀物、豆類、ホップ、馬鈴薯、蕪青、クローバ、牧草等に対して、塩は肥料として有効とされており、その使用量は土質と作物の種類に応じて異なるが、1エーカー当たり軽土壌には700ポンド、重土壌には300ポンドとされていた。

とくに甜菜に対しては塩の効果が大きく、1エーカー当たり500～1,000ポンドの塩を施すことによって13～20tの増収になるという報告もある。塩の効用として、塩を添加すると土壌中のカリ分が解離し、植物に吸収されるようになるという研究報告もある。

戦後の日本では、まず食べる塩の確保が精いっぱいの状態で、田畑にまく塩など思いもつかなくなった。また各種の肥料が工場生産されるようになったこともあって、アメリカでも農業用塩のほとんどすべては家畜飼料用であり、肥料用の塩はもはや統計にも表われない。

しかし、10余年前製塩指導にタイ国へ行く機会があり、その時現地で「同国カンペーンペット県で、水田の鋤起こしの際、土壌改良のため1ライ当たり10kg（1ha当たり62.5kgになる）の塩を撒布し好成績をあげている」という記事[5]を目にして、すっかり忘れ去っていた“肥料としての塩”を思い出した次第。

近年こんな記事もあった[6]。鳥取大学遠山助教授が海水を淡水でうすめた塩水でホウレンソウの栽培試験を行ったところ、塩分0.5%では成長が悪く淡水の半分程度、0.2%では淡水の場合とほぼ同じ。ところが0.1%だと淡水より成長が早く収量は淡水の30%増で、味もふつうのホウレンソウと変りがなかったという。微量の海水塩類は植物の生育に有効という結論である。

以上のような経緯を総括すると、陸生の植物にとって大量の塩分は一般論として有害であろう。しかし、植物も、ヒトと同じく、太古の海水中に発生した地球生物の仲間であるから、海水成分は必要とするはずである。ふつう肥料の三要素といえばN、K、Pであるが、この他にもMg、Caなどが多く使われている。

Mg、Ca、Kは海水中で塩につぐ成分である。塩は、植物体の構成要素ではないし、また生育のエネルギー源でもないが、ヒトにとってのミネラルと同様、量的には少なくても欠かせない成分が数多くあるはず。その中の幾つかは海水成分と同じとみるのが素直な考え方であろう。また、土壌成分と塩分は、イオン変換によって肥効性あるいは土質改善の効果を発揮すると考えられる。

植物および土壌と塩との関連は、まだ充分に解明されていない面が多く、これからの問題のように思われる。

文献

1）福永範一；『製塩と苦汁工業』第3版，（昭和25）
2）山田　清；『塩と文化』（昭和45）
3）農務局；『費氏塩録』（明治16）
4）F.E.ハリス；『塩の需給に関する調査報告』　米国国務省鉱山局刊（1939）
『アメリカにおける塩需給の現況』　専売局塩脳部（昭和22）
5）週間バンコク，昭和56．4．27.『経済と社会』　タイ国経済社会開発委員会
6）日本経済新聞，平成2．6．25.

財団だより

1．財団創立5周年記念の科学書『塩化ナトリウム』邦訳版の配布（平成5年9月）

財団創立5周年を記念して、標記科学書を出損企業ほか関係先に配布しました。

2．塩の機能とその科学-食と健康を考える-講演会(平成5年10月9日(土)日本都市センター)

標記講演会が日本海水学会の主催、日本栄養改善学会、日本食品工業会、日本家政学会および日本調理科学会の共催、ソルト・サイエンス研究財団の後援により開催されました。

3．平成6年度助成研究の募集

平成6年度助成研究を本年11月1日(月)から平成6年1月15日(土)まで募集しております。(募集要項は関係学会誌、月刊ソルト・サイエンス情報誌および本誌46頁に掲載)

4．国際脱塩・水環境保全会議（平成5年11月3～6日(水～土）パシフィコ横浜）

標記会議が造水促進センター主催、ソルト・サイエンス研究財団の協賛により開催されました。

（予定）

5．第12回研究運営審議会（平成6年2月15日(火）虎の門パストラル予定）

平成6年度の研究助成の選考が行われる予定です。

6．第35回海水技術研修会（平成6年2月17～18日(木、金)）

標記研修会が日本海水学会の主催、日本塩工業会、造水促進センター、ソルト・サイエンス研究財団および日本たばこ産業㈱の共催により、箱根町「箱根観光会館」で開催されます。

7．第12回評議員会（平成6年3月4日(金）東京プリンスホテル予定）

平成6年度の事業計画および収支予算等が審議される予定です。

8．第12回理事会（平成6年3月4日(金）東京プリンスホテル予定）

平成6年度の事業計画および収支予算等が審議される予定です。

平成6年度助成研究を募集

(財)ソルト・サイエンス研究財団では、平成6年度助成研究の公募を次のとおり行います。

〔助成の対象〕 海水濃縮技術、食塩結晶の製造および加工技術、海水資源の採取および利用技術、食塩やミネラルの生理作用、および食品加工や調理における塩の用法や役割などに関連する研究に対し助成をします。特に、若手研究者の積極的な応募を期待しています。

〔助成件数〕 全体で60件程度

〔助成金額〕 1件当たり50～300万円以下

〔応募の方法〕 当財団の応募要領により、当財団に直接申し込む。

〔申込期間〕 平成5年11月1日から平成6年1月15日まで

〔申込・問い合わせ先〕

〒106 東京都港区六本木7－15－14 塩業ビル3F
(財)ソルト・サイエンス研究財団
電話 03-3497-5711 FAX 03-3497-5712

編集後記

冷夏、長雨などの被害で米が約200万トン不足するそうで緊急輸入することが報道されました。近所のスーパーの米売り場をのぞくと「一人に5キロ入り1袋まで」の貼紙がしてあり、どこの店でも一時は品切れ現象が見られ、不作の深刻さを改めて実感しました。

海外旅行の機会があり、パンと外米を食べてきましたが、日本のご飯が無性に恋しくなりました。やがて、外米混じりの米が店頭に現れることでしょうが、味のほうが気になるところです。

経済不況に農作物の不作が加わり激しく揺れ動いた一年でしたが、来年は景気が回復し、また豊作になることを祈って、私たちにとって明るい年でありたいと念願します。

今年も、小誌をご愛読いただきありがとうございました。ご協力ご支援を賜りました皆様にお礼申しあげます。

皆様からのご意見・ご要望と、積極的なご投稿をお待ちしております。

|そるえんす|

(SAL'ENCE)

第 19 号

発行日　平成５年12月31日
発　行
財団法人ソルト・サイエンス研究財団
(The Salt Science
Research Foundation)

〒106 東京都港区六本木７-15-14
塩業ビル

電　話　03-3497-5711
ＦＡＸ　03-3497-5712